

# 伝 記

## 第一章 幼少年時代

### 第一節 生いたち

先生は明治四年（一八七二）十一月三十日父喜惣治氏・母トクさんの長男として、群馬県群馬郡豊秋村中村二番地（現渋川市中村）に生まる。祖父民平氏は横浜開港後生糸商として活躍し、生糸の産地には、遠近を問わず、常に乗馬して取引に赴き、その区域は上州は勿論、信州の各地にも及び、上田の業者との取引も記録に残っている。かくて家業たる農業は殆ど顧みる暇がなく、しかも子供は喜惣治氏の外にその姉一人・妹一人の三人であったが、その姉が嫁いたので、人手が不足し、喜惣治氏が十五才で元服すると同時に十四才のトクさんを嫁に迎えた。しかし子供が生まれないので、当時の地方慣習上祖母ユキさんを中心に、離縁話が出て来た。祖父民平氏はこれを排し、近くの早尾神社に孫誕生の祈願をかけて、毎日欠かさず早朝の参拝を続けた。この際その境内にある「お足跡」の大石に石の柵を納めて「針塚民平建之」と刻銘した（慶応三年）。これは現存する。その効験あってか、結婚後九年目、トクさん二十三才の初冬先生が生まれたのである。一家親族挙げての祝福は想像に余りあるう。

### 第二節 小中学校時代

先生は明治十一年（一八七八）中村小学校に入学した。全校約四十名の生徒に対し、教師は唯一人だったので、針塚少年は授業生のような形で教師の手助けをした。当時既に学業成績及び人物が、群を抜いていた一証左とも見られよう。

次いで四明尋常高等小学校（渋川・中村・石原・湯上の四部落共立）高等科に入学して、明治十八年（一八八五）十五才で卒業し、その年木檜中学校（県立前橋中学校の前身）に入学した。父喜惣治氏は聞こえた篤農家であり、長男の先生を当然家業の相続人と心に決めていたので、先生に対する農作業の訓練は極めて厳しく、常に「家の者は雇人の二倍以上働かねばならない」と言う主義方針を徹底的に実行した。従って学校から帰れば直ちに野良に出て日暮れまで農作業し、学習などには寸暇もなかった。当時近在では先生を通称「早やの長さん」と呼んでいたのは、農作業に対する先生の励精振りを物語っている。

この間の実情を先生の手記によって窺知しよう。

（前略）私の幼少の時（明治十五、六年頃）は田畑僅かに八、九段歩に過ぎなかった。父は朝は未明より仕事にかゝり、朝食前に既に他人の半日分位の業務は了へました。夜は必ず夜深くなる迄夜業を致しました。祖母も母も皆氣を揃へて一生懸命働いてくれました。そのお蔭で私は修業が出来ました。学費を送って下さるのに何程かお骨を折って下さったことせう。実に有り難いことです。生涯忘れては済みません。

私も幼少より父母より厳格な教育を受けました。家では本を読む暇も与えてくれませんでした。必ず農業やら夜業やら朝から晩まで働くのでした。本を読むのは学校にをる間丈けでした。お蔭で時の貴いことを心から知ることが出来ました。労働の貴いことも金銭の貴いこともしみじみ知ることができました。之は私の生涯の幸福でした。（下略）

（父喜惣治氏「針塚長太郎学費明細書」の後部余白に先生毛筆にて書いた「思ひ出の記」より）

一方母トクさんは渋川町行幸田の豪農奥泉家の生まれだったが、当時地方の風習として女の子は寺小屋に行かなかったで、文字が無い。然るに祖母ユキさんは読み書きが出来た。トクさんの人知れぬ苦衷が察せられる。そのためか先生の教育については、早くから非常に熱心で、木檜中学校入学にも母トクさんの力が強く働いたようだ。先生は小学校

時代から書方（書道）に熱心で、中学生の時既に石碑の文字を書いている。先生後年の名筆は既にこの時代から、その芽を見せていた。又駈け足が早く、小中学校を通して、常に一着だったと、伝えられている。

### 第三節 最初の上京

明治二十一年（一八八八）中学四年生の時「十日夜祭」（註）用の砂糖買いに、前橋に使いたが、時日の余裕があったので、その足で高崎から汽車に乗って上京した。東京に居る先輩知友を訪ねて、東京遊学の実情を聞いて廻ったらしい。先生自らの話によれば、その時上野から芝公園の近くまで徒歩で行き、宿泊は日頃の祖父の話から、それとなく屋号を心に留めていた馬喰町の或る宿屋に行ったが、満員で断わられ、途方にくれていたところ、その女将の好意で、いわゆる行灯部屋に泊まる事が出来たと言う。しかしこの東京行きで東京進学の決心が固まり、翌年三月中学四年で退校した。それから上京までの一時、地方の要望により、小学校の代用教員を勤めた。

（註） 当地方の農村行事。十月十日部落の青少年が脱穀した新しい藁を束ねて両手で持ち「トーカーヤ」を一斉に連呼しながら道路を叩いて歩く。農作物を荒らす土竜（もぐらもち）を退散せしむる祭事と伝わる。

## 第二章 東京時代

### 第一節 東京帝国大学農科大学

中学校を退学した年の七月、東京農林学校予科一年級に入学し、九月から登校した。この遊学には父喜惣治氏の強硬

な反対に対し、母トクさんは先生の熱望を助けて父の説得に努め、遂にその承諾を得た。翌年農科大学予科に編入され、明治二十九年（一八九六）七月、二十六才で東京帝国大学農科大学農学科を卒業した。在学中始めは、渋谷金王八幡の近くに草葺きの家を借り、「自炊堂」と称して同学の鈴木梅太郎・伊藤柳吾・菊地亀千代・望月滝三・中西水之丞・楠巖その他の諸氏と自炊生活を続けながら、徒歩で遠路小石川の講道館に通い、柔道の鍊磨に努めた。後には講道館の近くに移転し、駒場まで徒歩で通学した。その間伊藤柳吾氏と鹿児島に遊んで、明治維新の元勲の跡を尋ね、桜島大根の種子を実家に送り届けたこともあり、陸軍将校だった菊地氏の義兄（姉婿）山本誠喜氏が京都高槻工兵隊に配属、伏見に居住していた当時、よく鈴木梅太郎氏等と菊地氏に案内されて、山本氏宅に滞在し、関西地方を観光したようだ。鈴木梅太郎氏とは、それぞれ進む道は違ったが、互いに協力して終生その親交に替わり無かったことは、衆知の通りだ。

なお先生の東京遊学に反対した父喜惣治氏は、最初学費の支給を肯んぜず、母親トクさんが、金策に百万苦心慘澹を嘗めたと、半ば伝説的に言い伝えられているが、前記喜惣治氏「針塚長太郎学費明細覚書」によれば、東京遊学の最初から、はつきり学費を支出していた。

## 第二節 大学卒業後の東京

**結婚** 自炊堂の同人だった菊地亀千代氏の義兄陸軍少佐山本誠喜氏は、日清戦争に出征して戦病死したので、その遺族は菊地氏を頼って上京した。然るにその菊地氏も死去したので、先生は大学卒業の年、菊地氏の遺志の形で、山本氏の長女ノブさんと結婚した。数え年先生二十六才、ノブさん十七才の秋だった。そしてノブさんの妹かうさん（御園白粉本舗伊東栄氏に嫁ぐ）と京子さん（夭折）弟誠一氏（医博）と同居、よく面倒を見られた。後年（大正十四年）先生満州視察の途次、海城通過の際この山本少佐戦死の地に向って黙禱を献げている（湯川秀夫君追想文）。

**任官勤務** 大学卒業後最初は拓殖務省に勤務したが、これが廃省後明治三十年（一八九七）十一月から横浜生糸検査所と西ヶ原蚕業講習所に約半年勤めた。蚕糸業との関係は既にこの時結ばれたのである。同三十一年（一八九八）五月文部省に転じて、高等師範学校教授を兼ね、その後実業事務局第一・第二課長等を歴任して、同三十五年（一九〇二）九月文部省視学官に任命された。実業教育特に農業部門の担当だ。

**留学** 越えて同三十九年（一九〇六）二月農業教育研究の爲満二カ年間米独に留学を命ぜられ、四十一年（一九〇八）五月帰朝して文部省視学官に復職した。後年或る時期の文部省系実力者沢柳政太郎・松浦鎮次郎両氏とは、留学先で親交を深め、各自それぞれの分野において、一生を通じ互いに協力援助を続けている。留学中盛岡高等農林学校教授に任じたのは、官制上名儀のみの任命だった。ただ先生一生の親友鈴木梅太郎氏が、当時この盛岡高等農林学校の教授だったことを附記して置く。

### 第三章 上田蚕糸専門学校長時代

#### 第一節 上田蚕糸専門学校の創立

明治三十七、八年（一九〇四―五）日露戦役後のわが財界は、各方面とも異常な活気を呈し、蚕糸業もいよいよ輸出の大宗たる実力を示して来たので、当時国民経済の、一層の発展振興を期するには、この蚕糸業の発達を計るに如くはないとの結論に達し、時の文部大臣牧野伸顯氏は、斯業の人材養成の急務を認めて、明治四十年（一九〇七）国立の高等教育機関設立の案を具し、第二十四議会にて成立の四十一年（一九〇八）度予算中に、その創立経費を計上している。

従つて前に述べた三十九年（一九〇六）二月「農業教育研究」の目的で米・独に留学した先生は、既に当時文部当局が実現を期していたところの、蚕糸業に関する最高学府の主宰者たるべく、内々予定されていたと見るべきだ。事実帰朝後席温まる暇もない四十一年（一九〇八）八月蚕糸専門学校創立委員を命ぜられ、欧米の最新知識を基礎として、画策大いに努めた。時の文部次官沢柳政太郎・実業学務局長真野文二（工学博士）の両氏は、先生の構想たる栽桑・養蚕・製糸・紡織・染色等蚕糸業に関する一切の事項を、相互関連的に実習・研究し得る一貫的施設の要望を認め、先生を四十年（一九一〇）五月米沢高等工業学校長事務取扱に任命して、織染部門の設備や学校運営の実際を見聞する機会を与えた。初め政府は学校の設立地を長野県とのみ決定発表したので、上田町と諏訪町との間に、その争奪運動が、熾烈に展開された。しかし、上田地元の工藤善助・南条吉左衛門の両代議士及び郡長・町長其の他官民合同の協力により、四十三年（一九一〇）三月六日「上田蚕糸専門学校」の名称が、文部省直轄学校官制に掲載されたのである。次にその創立委員名を記す。

(一) 文部省関係

|     |       |    |       |   |        |
|-----|-------|----|-------|---|--------|
| 委員長 | 針塚長太郎 | 委員 | 朝比奈晃十 | 同 | 佐々木忠次郎 |
| 委員  | 本多岩次郎 | 同  | 三吉米熊  | 同 | 吉武栄之進  |

(二) 地方委員

|     |        |      |       |    |       |
|-----|--------|------|-------|----|-------|
| 委員長 | 中島精一   | 副委員長 | 石田四方太 | 委員 | 金沢五一郎 |
| 委員  | 河合操    | 同    | 関弘矣   | 同  | 関口戒三  |
| 同   | 寺田直太郎  | 同    | 中沢勝次郎 | 同  | 成沢伍一郎 |
| 同   | 長谷川長兵衛 | 同    | 馬場歳次  | 同  | 細川吉次郎 |
| 同   | 本田与四郎  | 同    | 丸山平太郎 |    |       |

## 第二節 学校長の任命と教職員の陣容

校長任命と設備 明治四十三年（一九一〇）八月十三日先生は文部省視学官兼務のまま、国立上田蚕糸専門学校長に任命された。時に齡三十八才であった。翌四十四年（一九一一）養蚕・製糸の二学科を以て開校に決定していたので、取敢えず、文部省実業学務局室の一隅に創立事務所を設け、局員の事務的援助を得て、教職員の人選と校舎設備の完成とに専念した。しかし蚕糸専門学校は日本で最初であり、外国にもその例がなく、各創立委員にしても、蚕糸紡績に関する一貫した知識経験を有する者なく、文部・大蔵の両省に取っては、全然新規未知の部門なので、創立予算の如き、相当杜撰なものだった。例えば広大な農場を有するのに、農場舎設備の予算がなく、紡績機械一セットの半分しか買えない予算に切り詰め、工場建設予算を全額抹消して、機械の置き場を認めず、更に動力室の予算も全然無かった。こうした実状で予定通り四十四年（一九一一）四月十七日開校したのだから、先生の苦衷は察するに余りあろう。先生は後年この実情を「当校は学校の畸形児として生れた」（千曲会報昭和十年—一九三五—十月十五日懷古号）と述べている。

創立当時の教職員陣容 これに反して教職員の陣容は、先生独自の力と知人先輩の協力とによって、極めて順調に決定し、当時の直轄学校としては、他に比類の無いほど、新鮮優秀なものだった。文部省実業学務局内の創立事務所に真先に馳せ参じて、先生を助けた故阿形輝司教授は「丁度同時に創立せられる秋田鉦山・小樽高商の連中と雑居したが、他の学校の幹部が老人連なるに對して、上田の方は元氣満々の若者揃ひで実に面白いコントラストでした」（同前懷古号）と、当時の模様を述べている。

開校当時の主なる陣容を次に示そう（就任順）。



|     |       |      |      |     |       |
|-----|-------|------|------|-----|-------|
| 法学士 | 阿形輝司  | 農学士  | 勝木喜薰 | 工学士 | 大滝照太郎 |
| 文学士 | 和田仙太郎 | 農学博士 | 大森順造 | 農学士 | 三吉米熊  |
| 農学士 | 川瀬惣次郎 | 農学士  | 北島鉞雄 | 三   | 谷徹    |
| 工学士 | 朝比奈晃十 | 新    | 樂金橘  | 理学士 | 築地宣雄  |
| 工学士 | 石倉新十郎 | 水    | 井寿一郎 | 平   | 本常三郎  |

大森順造博士は針塚先生と大学同期で、盛岡高等農林学校教授の経歴があり、当時養蚕学界の学位保持者は、外山龜太郎博士とこの大森博士の二人だけだったので、新設の蚕糸専門学校としては、実に得難い人材だった筈だ。三吉米熊先生は明治十三年（一八八〇）東京農科大学の前身勸業局農学校を卒業した我が国養蚕学界の最長老で、当時上田町所在県立小県蚕業学校の校長だった。専門学校の文部省側創立委員だったことは前に述べた。当校を長野県に、そしてまた上田町に設立実現するまでの、陰に陽に働かれた力は相当大きかったようだが、当校創立後も若い針塚校長を助けて、教職員間に円満協力の気運を醸成し、また地方・中央の業界・政界などの実情に適した発言施策により、学校繁栄の礎石をなした例も尠なくない。針塚先生もその間の片鱗を「教官会議を開きて甲論乙駁論果てしないときは、何時も三吉先生の常識的の円満なる仲裁的意見に帰着するのであった」（三吉米熊先生「跋三吉先生を偲ぶ」）と述べている。

工学士朝比奈晃十先生も創立委員の一人だったが、本校設立当時は欧州留学帰朝早々で、留学中は人造絹糸の研究にも触れたと伝えられ、工業化学を講義した。大正の初期早くも人絹製造の実験設備を附設したことは、針塚校長の學術研究に対する自由と寛容とを実証するものだ。これは昭和十五年（一九四〇）の纖維化学科独立に対する一石とも見られよう。又新進の化学者井上（創立当時は海外留学中）・川瀬西先生の任官は、針塚先生年来の親友鈴木梅太郎博士の推荐によるもので、その鈴木研究室からは外に井上先生の助手（後に講師）として、岩岡末彦先生を任用している。かくて

化学陣容の整備は、他の同種直轄学校にその比を見ない優秀な数々の実績と伝統とを築き上げ、本校特色の一をなした。更に勝木・北島の両先生によって、遺伝学・生物学等に基礎を置く養蚕学への新分野開拓を計った。養蚕・製糸科はこうして科学的・機械的研究を通して、将来独自の成果を意図すると同時に、一方従来の方法技術を改善して、業界を指導誘掖することも、实际的に極めて重要だった。三谷徹先生は東京蚕業講習所勤務のかたわら、全国各地に出向して製糸技術の实际的改善指導に当り、業界には既に名の通っていた人材だ。創立委員東京蚕業講習所長本多岩次郎先生の推挙によって教授に任命し、下田穰先生を講師として三谷先生を助けさせ、次いで藤崎卓爾先生を助教授とした。養蚕科においても、群馬県高山社で既に養蚕飼育の实际的指導に名声のあった高橋清七先生を講師に任用し、実際に即した飼育技術の実習講義に当らせた。

更に大滝・築地・石倉先生等の理工学士や平本先生（東京高等工業卒）も、本校陣容の特異であった。人材の乏しかった当時、しかも直轄学校とは言え、田舎の農業系新設校だ。それぞれ有力な推薦者と針塚先生の手腕熱意によって、始めてこうした人々の任用が出来たのである。科学と技術との尊重、これが当時針塚校長の真意だった。半世紀後の今日を明確に達観していたのだ。

語学担当として仏文学専攻の和田仙太郎先生も異色だ。また修身担当に新築金橋先生を得て、生徒監に任じ、校風の練成に協力したことを記して置く。針塚先生が文部省視学官時代、新築先生は宮城県立白石中学校の校長だった。「実践躬行」を校訓として、生徒の先頭に立ち、校庭に野菜を栽培しているのを見て、その教育内容を査察し、全国模範中学表彰三校の中に加えたのであった（新築頭理先生談）。

其の後の陣容　大森順造（大正五年四月退官）・朝比奈晃十（同六年二月同）・勝木喜重（同七年三月同）先生等創立に参加した首脳教授が、早くも退官したが、遠藤保太郎（大正四年七月任官）・佐藤利一（同五年十一月同）・松村季美

(同六年五月同)・佐藤春太郎(同七年七月同)先生等、新進気鋭の研究陣が、その缺を補った。一方築地宣雄先生を推薦した東京帝国大学長岡半太郎博士の研究室からは、原田親雄(明治四十五年四月任官)先生を採用して、数学・物理実験・独逸語を担当させたが、築地教授の退官(大正八年六月)後は、物理・気象学をも教えた。なお蚕糸経済専攻の早川直瀬(大正元年九月任官)先生を採用したことも、教授陣容の拡大強化をもたらした。更に電気工業の新樂顯理(同八年四月任官)・化学の古谷栄蔵(同八年九月同)・織機・紡績原料の岡徳治郎(同十年一月同)・機械の内田浩(同十二年十二月同)・化学の金子英雄(同十五年十月同)諸先生の採用も、針塚校長の技術的・科学的基礎研究による我が蚕糸業の一貫的改善発展を目標としたものである。本校卒業生の教職陣参加も漸く顕著になった。松村季美君(蚕二)は前に述べたが、速藤文平(糸一・大正六年九月任官)・児玉忠雄(糸二・同七年四月同)・森山二郎(糸四・同八年四月同)・林貞三(糸三・同九年五月同)・石坂虎治郎(糸五・同十年二月同)・樋口琢磨(蚕五・同十二年四月同)・蒲生俊興(蚕一・同十二年四月同)・甲田勝衛(糸七・同十二年四月同)・榊原春彦(糸八・同十四年六月同)・田中定男(糸九・同十五年十一月同)・須田圭三(蚕二・同十五年十一月同)・窪田潤(糸一二・昭和三年四月同)・荻原清治(糸一二・同六年六月同)・倉沢美徳(蚕二・同六年五月同)・野口新太郎(紡二・同七年四月同)・山口定次郎(蚕一二・同九年一月同)・香山清和(紡三・同九年一月同)・小林尚一(紡八・同十一年十二月同)の諸君が、任命されている。かくて針塚校長退任の昭和十二年度には、総教授数十五名中四名・同助教授八名中六名の卒業生教官が在任していた。

### 第三節 絹糸紡績科の増設

**増設の基礎準備** 絹糸紡績科の設置は、創立当初からの計画だったが、養蚕・製糸二科の設備を優先したため、残余予算では前述の如く紡績機械の半セットしか買えなかった。創立委員だった吉武栄之進博士(東京高等工業学校教授・後

に同校々長）は、その後も引続き好意的の協力を続け、明治四十四年（一九一二）四月東京高工教員養成科卒業の平本常三郎先生を推薦して助教授とし、当時絹糸紡績を經營していた鐘ヶ淵紡績株式会社（以下鐘紡）上京工場の一職工として、技術を習得させた。一方東京帝国大学工科大学教授斯波忠三郎博士を介して、同大学卒業の工学士石倉新十郎先生を聘して、紡績部門の主任とし、明治四十四年（一九一三）十月、これまた吉武教授の紹介により、郡山絹糸紡績株式会社工場に入って、実習することになった。その後石倉先生は鐘紡岡山工場にて一カ月間の見学を許された。当時鐘紡工場は各社とも絶対閉鎖的嚴秘の鉄則によって經營していたから、文部大臣と針塚先生の依頼状及び石倉先生本人の誓約書を提出して、漸く入場を許されたのであった。絹糸紡績部門の予算も、針塚校長の努力と文部省実業学務局長真野文二博士等の仲介によって復活し、必要設備の購入設置が可能となった。時たまたま石倉・平本の両先生も貴重な経験・知識を会得して帰校し、夜を日に繼いで据付に努め、遂に工事開始後一カ年にして試運転に成功したのである。かくて製糸科一回生は第二学年から機械工学・応用力学等の講義を受け、三学年では紡績・撚糸・機織の講義実習を受けた。従って本校製糸科卒業生は、最初から紡績工場に就職が可能だったのである。

**設置の実現** 創立以来毎年絹糸紡績科の創設を文部省に要請していたが、実現の運びに至らなかった。大正七年（一九一八）秋文部省會計課長山崎達之輔氏來校し、設備を見て事情を聞き、絹糸紡績科設置の必要と可能とを認めて、文部省も漸く動くこととなり、翌八年（一九一九）新学期からの開設を決定した。当時この絹糸紡績科創設の功勞者の一人平本常三郎先生は既に退官していたが、石倉科長のもとに、清水寛孝・森山二郎・目崎三郎・小林清丸先生等の陣容を有し、紡績・撚糸・機織・メリヤス・染色等の講義実習から、これと関連する機械工学・設計製図に至るまで、一貫した機構施設を備えていた。なお昭和九年（一九三四）四月一日絹紡織科と改称し、始めて名詮自性の実を示すことが出来たのである。

#### 第四節 教婦養成科の新設

模範製糸工場案 針塚校長は製糸業の発展に対し、技術的にも經營的にも、高遠な理想と希望とを有し、前者には工学士大瀧照太郎先生、後者には農学士早川直瀬先生を配して、将来を期待していたが、製糸業の現状に立脚した實際的指導改善も重視したことは、前に述べた。この目的達成のために、三谷徹先生を中心として、学校附屬の「模範製糸工場」を建設し、それによって業界の技術向上に資せようと計画し具体案を作成した。これには当時の「蚕糸王国」長野県地元の了解援助も必要だったので、当時の長野県知事力石雄一郎氏の協力を求めたが、知事更迭もあり、実現しなかった。

教婦養成科 一方従来製糸科施設の工場において、繰糸・再繰・検査・整理その他製糸技術全般を修得し、製糸科の試験・研究・実習等の作業に携わっていた「製糸業手」中の成績優秀な者を、製糸業者の要求により、教婦として推薦して来たが、昭和六年（一九三一）四月業界各方面の要望に応えて、修業年限二カ年の教婦養成科を新設し、製糸技術の改善普及を計ることにした。形を変えた「模範工場」の実現である。入学資格は高等女学校卒業程度とし、同年五月十一日第一回生徒募集を行なった。これは製糸教婦科の前身である。

#### 第五節 人間育成

校風 「実践躬行」を校訓とし、率先自ら生徒の先頭に起って、教育の実績を挙げていた新築金橋先生を招いて、修身を担当したことは前に述べた。針塚校長は常に「質実剛健」「進当難局挺身従事」を唱道して、誠意の無い技巧的策動を戒しめ、「至誠を以て努力を重ね、一步一步前進せよ」（第七回千曲会評議員会）と教え、「力不勝於徳」をよく引

用された。又事ある毎に「事業は人物なり」と言い、「人失はれて事業頽る……人格を向上せしめて渾身の力を致せ」(昭和七年三月卒業式)、「凡そ事業の成否は人物の如何に懸る。大事業は必ずや大人格者に俟たざるべからず」(同九年三月同)、「凡そ事業は人なり、優れたる人物にあらざれば、偉大なる事業は遂行されざるべく……国家社会のため、常に身を以て衆を率ゐる意気に燃えんことを希ふ」(同十二年三月同)と述べている。これ等の教訓を「実践躬行」し、針塚先生自ら、精神的にも肉体的にも常に先頭に立って、学生を率いたのである。当初第一回生は養蚕・製糸の別無く、入学早々講義も聞かずに、全員鋤鋤を持って桑園造成の筋肉労働が、幾日か続いた。針塚先生は終始その作業場を離れず、鋤の持ち方、使い方、天地返し(一種の深耕法)など、実演指導に努めた。しかも「一事貫行」「百忍図成」聊かも倦むべからず、であった。校歌(二)は「夜を日につげる労働に 神の恵みぞやどるなる 身にしむ汗は世を救ふ 深き同情の涙にて」で、この「身にしむ汗」を肉体的にも精神的にも、尊いものと教えたのである。「青年熱汗当拭老後」を引用して、「青年時代は拭ふ暇も無い程汗を出せ、即ち目的に向ひ全力を挙げて精進せよ」と言われた。この精神はたちまちして全校を包被し、後来教官も学生・卒業生も、至るところのそれぞれの部門で、この針塚精神即ち上田校風を發揮している。

**人材の養成** 校風の究極目標は、真の人材育成にあること勿論である。針塚先生は本校創立の際、当時既に留学中の大森順造・朝比奈晃十・井上柳梧の各先生を、本校教官に決定又は内定して、人材を確保し、創立後間も無く勝木喜重先生を独・伊・仏に、大滝照太郎先生を独・米に留学せしめた。その後第一次大戦の勃発によって、留学も一時中断せざるを得なかったが、大正六年(一九一七) 早川先生の米國留学をきっかけに、石倉先生(大正八年三月) 北島先生(同十年一月)・川瀬先生(同十年三月)と続き、針塚先生在官中の欧米先進國への留学者は、実に十八名の多きに及んでいる。なお針塚先生が教官の留学について百方苦心努力していた実情の一端を、左の針塚先生宛文部省実業学務局長眞野文二

博士の手紙によって窺知されよう（明治四十四年十二月十六日附）。

拝啓陳者貴校分の留學生は本年度中に一人來年度に相成更に一人と申事に相成居候へども本年度に二人派出相叶候哉も難計就ては貴校の御都合至急御一報預り度候尤も本年度中に留学致させ候はゞ明年度は派出六ヶ敷事と存候へども兎に角少しも早く留學者を出し置く方宜敷かと存候

右お含みの上御意見御申越被下度候頓首

## 文二拝

そして前記の如くこの年度には、勝木・大滝両先生の留学が実現している。

かくて教官の研究は、それぞれ其の専攻部門において、概ね深奥な成果を挙げ、多数の学位授与者が出たのである。即ち針塚校長退官の昭和十二年（一九三七）度教授十五名中、学位保持者は、農學博士井上柳梧・同遠藤保太郎・同佐藤利一・同佐藤春太郎・理學博士金子英雄・農學博士蒲生俊興各先生の六名あり、これは當時同種直轄学校中最も優位に立っていた。勿論学位のみが研究成果の目安とはいえないが、尠なくとも当該部門においては、研究の優秀を証明されるだろう。なお創立以來この昭和十二年（一九三七）度までに退任した教官の学位保持者は（講師を除く）、三吉米熊・大森順造・勝木喜童・川瀬惣次郎・北島鉞雄・早川直瀬（何れも農學博士）先生の六名である。

一方卒業生について見るに、昭和三十五年（一九六〇）十月現在で、農學博士二十三名・理學博士四名・醫學博士六名・工学博士二名、計延べ三五名となっている（八木誠政君は理・農學博士を保持）。前に述べたように、これによって其のまま研究成果の評価に当てはめることには、多少の無理もあるが、針塚先生謂うところの、一事實行・百忍図成の結果たることは、断言していいと思う。従つて他の多数の卒業生も、發明考案・技術の改良研究・事業の經營管理等において、それぞれ特異の存在を示した者の多いことは、針塚精神即ち校風の發露と断言して憚らない。

## 第六節 武道の奨励

針塚先生が東京大学農科大学に在学中、最初渋谷の宿舍から小石川の講道館に徒歩で稽古に通ったことは、前に述べた。本校校長任官当時は、講道館初段であった。開校と同時に講道館三段齋藤良二郎氏を師範に囑託し、第一回生から寒稽古を始めた。剣道も和田仙太郎教授を部長として、柔道と同時に寒稽古を開始したが、針塚先生の武道奨励は、それが技の上達はもとより、それ以上に流汗鍛錬即ち身心の錬磨と人格の向上とを、主要目的とした。従って毎年三週間の寒稽古には、零下十度を下る酷寒の候、黎明四時に家を出られて、初期には和服に袴、後には洋服で道場の正面に正座し、熱心に柔剣道の稽古を觀て、最後まで膝を崩さなかった。学生は勿論各教官も、この先生の熱意に励まされて、寒稽古出席者は極めて多く、本校の一偉觀だった。大正五年（一九一六）一月飯塚七段（當時）を名譽師範に招聘し、佐藤善衛師範（當時五段）及びその後任岩崎喜三郎師範（當時五段）と協力して、寒稽古の指導に当たってもらった。一方剣道も和田部長のもとに、早野清三郎練士、その後任に小沢丘練士を得て、柔道と共に本校の一名譽となった。それぞれ対校試合には常に優秀の成績をおさめ、柔道の如きは、東日本高農大会において、昭和十二、三、四年（一九三七、三八、三九）の三年連続優勝し、また全国高等工業大会にても、昭和十四、五、七年（一九三九、四〇、四二）と三連覇を得た（十六年は休会）。

道場には海軍大臣當時の八代六郎氏書「正其心」と加納治五郎先生書「順道制勝」の額面が、稽古を鼓舞する形で、掲げられていた。

針塚先生は常住座臥、常にわが国固有の武道精神を尊重し、創立当初には柔道部学生主催の寒稽古納会祝賀に出席して心措きなく歓談し、宴半ばに主催者の手に、そつと紙幣を握らせて帰ったなどの挿話も残っている（矢沢茂登一君追想



文)。また武道部員の卒業に際しては、時に日本刀を贈ったり、琴心劍胆・学劍養正・流汗鍛鍊・柔弱勝強剛・柔能制剛等の扇面又は色紙を書き与えて、一生の修鍊に資したのである。

## 第七節 在校生・卒業生等の集団行動

ストライキ 本校の創立は蚕糸業に関する直轄学校としての最初のものであっただけに、教官の陣容整備には、針塚校長の人知れぬ苦心があった。草創期の蚕糸学界で、人材も甚だ尠なく、養蚕に関する博士は外山亀太郎氏と大森順造氏の二人だったことは、前に述べた。針塚校長は今後蚕糸業に関する学者・研究者などを、自分の手元で育成する決意をし、それには他の推薦もあり、自分と大学同期で、当時留学中の大森順造博士を任官し、後輩の指導に当らせる心組みだったようだ。従って他の教官は何れも新進気鋭、未知数の将来を囑望される人たちだった。その大森先生が針塚校長と意合わず、帰朝後在職僅か三年にして辞任せられた。大森先生の辞任と時を同じうして、勝木喜童先生がドイツ留学から帰国し、若い教官や学生の指導誘掖に当った。たまたま大正七年（一九一八）二月養蚕科一年生が、学校内部の革新を期する理由のもとに、針塚校長排斥運動を起こして、同盟休校した。その宣言文に「硬骨ノ士ヲ斥ケテ権力ヲ乱用シ」などあるところを見れば、前の大森博士の辞職などに絡ませて、学校内外の道聴塗説に動いたものと推測されるが、針塚校長は泰然として動かず、忽ちにして四圍の情勢はスト側に絶対不利となり、学内の反対や卒業生有志の説得もあって、約一週間で終熄した。学校側は築地・大滝両教授が主となって、具体的な善後処置を講じ、スト参加者を各教官に三、四名ずつ割当てて、個人的に懇談して今後を自覚させ、一方教授会は殆ど全員を無期停学に処した。しかし学年末でもあったので、約二週間で全員これを解除し、学校側からの退学処分者は一人も無かった。しかし、このストに多少同調の意向だったと伝えられた勝木喜童先生は、その四月退任して国立蚕業試験場に就職した。越えて昭和十二年

(一九三七) 二月勝木博士の葬儀に読まれた針塚校長の弔辞は、声涙共に下るの慨で、創立当初設備未完成の際に、桑園の造成から、実験実習の指導等に対する貢献を述べ、満腔の感謝を表明している。

**昇格運動** 大正八年(一九一九)夏頃から、全国専門学校の大学昇格運動が花々しく展開された。当校においても主として在校生を中心とし、これに卒業生の有志が全国各地から来田して、在校生の幹部と連絡を保ちつつ、地元の県知事・県議会・業界有力者の決起を促がし、協力して中央に働きかけた。一方上田蚕糸専門学校大学昇格期成同盟会の名義で、全国の卒業生その他に昇格達成の檄を送った。針塚校長は表面上終始静観・冷静な態度を続けていたが、打つべき手は機を外さず打った。ために一時は文部省内にても、本校の大学昇格は内定の形勢となり、針塚校長から昇格の場合の具体案を徴した(篠田平三郎君追想文)。しかし、結局は全国一斉に昇格中止となったが、将来昇格の可能性を認めた学校には、取り敢えず専攻科を設置することとし、それが準備期間として毎年継続する経費予算を計上可決した。当校もその選に加わって、少額ながら数年間その経費の支出を受けた。しかし時の変化は専攻科の設置実現を、解消してしまつた。

**針塚校長転勤の新聞辞令** 昭和二年(一九二七)八月東京朝日新聞紙上に、高等専門学校校長転退職者名の内定一覧表が発表された。その中に針塚校長の名も発見され、学校内外は愕然とした。旅行中だった針塚先生の帰校を電請し、一方全国の卒業生は留任運動に起ち上り、有志幹部はたまたま諏訪地方に遊説中の鉄道大臣小川平吉氏に面会して、その真相を尋ね、留任の尽力を依頼した。そして小川鉄相の斡旋で、文部大臣水野練太郎氏にも会い、新聞の誤報であることを確めた。一方針塚先生は旅行先から帰校後この問題に関し、「伝えられるが如き盛岡高等農林学校へは赴任出来ないし、その場合には先任者として退職するのが、官界の常道だ。どうかこの問題に関する限り静観して呉れ」と言い置いて、又旅行に出られた。一同はその立派な態度に打ちのめされた形だった。その後一カ月ばかり過ぎて、文部次官

山崎達之輔氏が上田に来られた際、誤報であったことを再確認して、この問題は解決したが、これによって針塚校長の人格と信望、そしてその挙措進退の立派な態度が、中央と地方との別なく、普く知れ渡って、関係者は寧ろ「雨降って地固まる」の感に喜んだのである（花園作弥君追想文）。

## 第八節 創立二十五周年記念式典

大正三年（一九一四）十月養蚕・製糸各科三学年まで揃ったところで、開校式を挙行し、同九年（一九二〇）十月創立十周年記念式典を挙げた。校長は式辞の中で、それぞれその時期の現状を申し述べて、創立以来内外各位の厚き後援支持を感謝し、併せて今後一段の発展充実を實現し、大方の期待に添わんことを誓ったのである。

越えて昭和十年（一九三五）十月二十一日創立二十五周年記念式を挙行した。出席者は文部大臣松田源治（代理山枡参与官）・農林大臣山崎巖（代理芳賀横浜生系検査所長）・九州帝国大学満田農学部長・全国実業専門学校長、その他関係団体長・県知事・長野県選出貴衆両院議員・全国蚕糸紡績業者・地元有力者等約六百名・同窓会員約四百名計一千名の来賓を迎えて、午前十時より本校講堂において挙行された。校長式辞に次いで、文部大臣（代）・農林大臣（代）・長野県知事・九州帝大農学部長・全国直轄学校長総代・東京高等蚕糸学校長・繊維工業学界理事長・日本中央蚕糸副会長・実業家代表郡是製糸株式会社社長（代）・上田市長・卒業生代表田口敏夫君の祝辞があり、司会者から九州大学総長外五百余通の祝電を披露した。校長祝辞の要点を次に示す。

（前略）本校創立当時ノ学科ハ養蚕科及製糸科ノ二科デアリマシタガ、大正八年五月当時ノ會計課長タリシ山崎現農林大臣閣下ノ御尽力ニ依リ絹糸紡績科、即チ現在ノ絹紡織科ヲ増設シ茲ニ創立当初ヨリノ希望タル蚕糸紡織駢進ノ計画ヲ實現シ、更ニ昭和六年四月製糸教婦養成科ヲ増設シマシタ。

本校ノ敷地ハ創立當時ノ二万六千坪ガ三割増ノ三万四千坪ト為リ、建物延坪数ハ創立當時ニ比シ現在三倍余リトナリ、五千坪ニ達セントシテ居リマス。猶創立以來ノ経費ハ約五百万円デアリマス。

大正三年以來ノ本校卒業生ハ本科千三百六十九名、選科百七十八名、教婦養成科三十四名、合計約千六百名デアリマス。而シテ此等卒業生ノ主ナル就職先ハ養蚕科ハ官庁及学校、製糸科ハ製糸会社及官庁、紡織科ハ紡績会社及官庁等デアリマシテ、内地ノ三府四十三県ハ勿論、朝鮮、満洲、中華民國及米國ニ散在シテ夫々専門ノ業務ニ従事シ漸次相当ノ地位ヲ得テ実社会ニ活動シツ、アリマス。

現在ノ本校々員ハ教授十六名、配属將校一名、助教授八名、講師十二名、助手一名、書記六名、雇員三十一名、教婦五名ニ小官ヲ加ヘテ合計八十一名デアリマシテ、外ニ嘱託七名及傭人七十五名トガアリマス。

学生ノ現在数ハ養蚕科九十八名、製糸科九十一名、紡織科五十名、選科二十四名、研究科一名、教婦養成科三十七名、合計三百一名デアリマス（中略）。

本日茲ニ創立二十五周年記念式ヲ挙ゲマシタノハ二十五年ハ正ニ人生ノ半ニ相当シ、事業ノ一段落ト為ルモノナレバ、過去ヲ顧ミテ將來ヲ期シ、更ニ新ナル氣分ヲ以テ第二期ニ入ラントスル吾々ノ覚悟ノ声明ト見レバ敢テ無意味デハナイト信ジマス（後略）。

## 第九節 朝鮮・満州の視察旅行

大正十三年（一九二四）針塚先生は早くから朝鮮・大陸の農産業特に蚕糸業について、深い関心を持っていた。卒業生や在校生に対しても、常に鮮満方面への就職・活動を勧説していた。大正十三年（一九二四）に至り、年来の希望たる彼の地の実情を視察する機会を得て、先ず朝鮮に渡り、卒業生の現状を仔細に尋ねて今後を鼓舞し、当局者に対しては

朝鮮蚕糸業の有望性を説き、それが指導奨励方針について懇談した。更に足を伸ばして関東州・満州に至り、主として家蚕・柞蚕の現状を視察し、それが奨励策と将来の見通しについて当局と懇談し、卒業生の活躍を推進した。当時各地から得た資料を整理発刊した「鮮満の蚕糸業」の序文で、「朝鮮は天与の蚕業国なり（中略）。内地に於て行詰りを感じる蚕糸業は奮て朝鮮・満州に向つて蚕業移住を企つべきなり」と言っている。当時の針塚先生の立場としては、真に大胆至極は結論で今後の国内蚕糸業は、更に一步を進めて、絹加工業中心に伸展せねばならないと言う信念が、その根底を為しているものと思う。従つて其の後にも卒業生の朝鮮・満州方面への就職数は増加を続け、その活動範囲も着々拡大して行つた。

昭和十一年（一九三六）この時も朝鮮から大陸にかけての視察旅行だった。朝鮮では時の朝鮮総督宇垣一成氏と会談し、当局の推進しつゝあつた農村更生政策を中心に、蚕糸業奨励策の具体的見解を述べた。宇垣氏は針塚校長のドイツ留学時代、大使館附武官としてドイツに居つたので、互いに旧知の間柄だ。この時の結論でも、繭生産費中七、八〇%を占める労力費が極めて低廉なこと、氣候風土が養蚕に好適していること及び春夏秋蚕共に、朝鮮では当時農閑期に當つていたことなどから、その有望性を説いている（由井千幸君追想文）。「繭も生糸も大正十三年當時に比ぶれば、その品質は著しく向上して、内地産のものと同様となり、繭の処理については極力保護政策を執り、補助金を与へて各処に乾繭所を設置し、金融も兼ねさしている」（千曲時報昭和十一年三月十五日号）。また「蚕糸行政は本府が中心となつて合理的に整備されてゐるようだ」（千曲時報同前）とも言っている。

満州の柞蚕については、治安等の關係から停滞氣味で、一時八十億粒を生産した柞蚕繭も、當時三十七億粒と約半減し、三浦重雄（糸七）君が柞蚕工場の工場主任をやつていが、その工程は原始的の域を脱せず、一方湯川秀夫（蚕一）君の尽力により、柞蚕試験場が設置され、又安東柞蚕糸検査所も出来ていたが、近き将来の發展は極めて望み薄と見て來た（千曲時報同前）。

この視察旅行中朝鮮・満州における卒業生が、至るところで針塚先生中心に同窓会を開き、各自の担当業務その他について、先生の激励鼓舞の言葉を聞き、海外遠隔の地にある上、時局急迫の予感に襲われていた当時、全く慈父の愛に抱かれた感で、文字通り蘇生の思いを新たに、一層の精進を覚悟したと、当時の一人が洩らしている。

その間蒲生俊興（蚕一）教授を朝鮮蚕業政策視察に派遣しているが、先生退官後の昭和十三年（一九三八）五月林貞三（糸三）教授の中北支蚕糸業・満州柞蚕業の視察、同年十二月倉沢美徳（蚕二）教授の同様視察旅行は、ともに先生在官中の予定計画であった。なお早く満州に就職して苦心健闘の結果、その蚕糸業・柞蚕業の基盤を開拓した湯川秀夫（蚕一）君を、毎年定期に母校に招請して彼の地の実情を講演させた。

次いで針塚先生退官後の昭和十五年（一九四〇）満州に旅行されたが、それは一卒業生の一身上に関する問題解決のためであった（青木友弥君追想文）。

## 第十節 卒業生の就職斡旋

母校創立当初の業界一般は、専門学校出身の技術者を要求すること殆ど皆無に近く、又官界その他は、既に歴史のある農商務省所管の東京及び京都蚕業講習所出身者で、事足りていた。こうした環境において、全く新規に卒業生の就職地盤を開拓せねばならなかったのだから、校長先生としては、正に校名をかけての背水の陣を布いて、活躍された。百方関係を辿って、学校の教育方針を説明し、就職の斡旋方を依頼する一方、必要と認めれば、遠路を厭わず、自ら急行して説明了解を求めるを常とした。かくして就職し得た卒業生の多くは、官界業界を通じて、当時の新分野たる試験・研究又は純技術的方面に向かった。それ等は各自それぞれの部門において、「流汗鍛錬」・「一事貫行」を文学通り実践し、進んで難局を引受け、奮闘精進して校風の実証に邁進したので、一部からは愚直過ぎるとか、融通が利かないとかの非

難を浴びながらも、いわゆる技巧的策動を排して、一歩一歩その活動地盤を開拓して行った。例えば鮮満地方の如き、先生が大正十三年（一九二四）及び昭和十一年（一九三六）の二回視察旅行の際、養蚕・柞蚕の将来性を現地当局に進言したことは前に述べたが、これに対応して卒業生の鮮満就職を斡旋強化した。大正十三年（一九二四）先生最初の満州視察の際は、満州所在の卒業生が湯川秀夫（蚕二）君と後藤富次郎（糸二）君の二人だったのを、十三年後の昭和十一年（一九二四）の時は、既に百名を越え、何れもその処を得て活躍していた。一方満州国立野蚕試験場官制の試験研究目的中に「家蚕の研究も含む」の一項目を加えることが出来て、先生及び卒業生年来の希望が具体化せんとして終戦を迎えてしまった（湯川秀夫君追想文）。

一方朝鮮についても大正八年（一九一九）矢沢茂登（蚕一）君の赴任当時は、高橋善吾（蚕二）君の外朝鮮人の卒業生林漢竜・朴墉燮・金学仁（後に東晩と改名）（共に蚕一）の諸君だけだったが、昭和二十年（一九四五）終戦時には総数百名に近く、全鮮十三道中七道の蚕系主任官を占め、民間の業界においても、それぞれ優力な地歩を占めていた。

一方母校各科の就職事務担当者は、校長及び各科長と一体となって常時協力し、出張・紹介その他の便宜を与えられ、年末には特に校長先生の慰問激励を受けて、来る年の一層の活動を期するを常とした。

## 第十一節 蚕糸業政策への志向

針塚先生は早くから朝鮮・満州等の大陸に注目し、その農業政策特に養蚕業の将来性如何を検討している。大正十三年（一九二四）彼の地を視察旅行した結果、直ちに翌十四年（一九二五）一月号の蚕糸界報に「朝鮮及関東州への養蚕家の移住を勧む」の一文を載せ、気候風土・労賃その他の関係から、早晩国家はこうした方向の蚕糸業政策を打出すべきであると勧告している。次いで発刊された「鮮満の蚕糸業」の序文でも、前述の如く、養蚕移民を主張している。一方輸出

を生糸から絹製品に転換する必要を力説し、「今や製糸業は大革新の時機に直面して居ります。従来生糸のみを供給してゐた我邦はメリヤス及び織物として海外に広く販路を求むべき時機に当面しています。十四、五年前迄は紡績では糸のみを作っていたのが現在では織物としてどん／＼輸出しています。恰かもこの傾向は製糸業に向つて居るものと考えられます」（昭和八年十一月千曲会代議員会にて）。この論策は前の養蚕家移住論と表裏照応し、又母校に創立当初から紡織科の設置を目ろみ、着々その準備を進めて当局を説得し、遂に大正八年（一九一九）その宿願を達成したことも、この主張実現の大きな手段としたのであった。先生は伊仏の蚕糸業の推移盛衰を、実地についてよく見聞調査していたので、やがては同一現象が我が蚕糸業にも、具現すべきものとの予測を持っていたようだ。然し一方我が農村において、有利に養蚕経営を維持発展せしむる必要も痛感せられ、それには如何なる方策を採るべきかを論じている。即ち共同化・養蚕組合の設立・稚蚕共同飼育及び産繭共同処理等の提唱がそれである（蚕糸界報昭和五年一月号）。現在の養蚕経営改革論と、その基本理念は全く同一なのである。また過小農の多い我が農村の救済繁栄を期するため、工場の地方分散を主張し、それによつて農村の過剰労力の活用と、農産物の加工利用を計るべきである（千曲時報昭和十年一月年頭の辞）と述べているのは、先生年来の主張たる農本主義の維持発展に資するための論考ではあるが、現在の工場分散論とその根底において相通するものがあるのは、注目すべきである。

## 第十二節 祝賀と栄誉

還暦祝賀 針塚校長の還暦祝賀式挙行は、昭和五年（一九三〇）十一月同窓会代議員会で決議し、翌六年（一九三二）十一月二十二日上田市公会堂二階大広間において、母校関係者及び卒業生約二百五十名参集のもとに、先生及び御家族の出席を得て行われた。松村季美（蚕二）同窓会理事長の式辞・寿像贈呈・阿形輝司教授・伊藤競（糸二）君の祝辞があ



った。松村理事長の式辞を次に摘記する。

(前略) 顧レバ春酣ナル四月半バ本棚モ籬モ無イ草原ノ中ニ建テラレタ本館旧講堂ニ於テ養蚕製糸八十余名ノ新入生ヲ前ニシテ開校当初ノ訓辞を与ヘラレマシタ先生ノ温容其儘ヲ春秋茲ニ二十有一年内容外觀共ニ兼備セル母校ノ現校長先生トシテ還暦ヲ御迎ヘニナリマシタ先生ニ見出スノデアリマス(中略) 母校二十一年ノ歴史ヲ飾ル数々ハ一重ニ鮑ク迄蚕糸専門教育ニ一新機軸ヲ出サントノ先生ノ卓見ト涙ニ余ル献身的御努力トノ賜デアリマシテ私共其恩恵ニ浴スル一同ハ心カラナル感謝ヲ献ゲズニハ居レマセン(後略)

これに対する針塚先生の謝辞は、「今日本校の校長として無事還暦を迎えることの出来たのは、偏へに御列席諸君の御協力の賜で、祝賀式を挙行して頂くなどは、甚だ当らないのでありますが、折角の御芳情ですから、喜んでお受けいたしたのであります。」と述べられ、最後に「それにしてもこの祝賀式の模様を今は亡き両親にお見せしたかった」と申され、相当の時間涙のために言葉が途切れた。参列者一同頭を上げる者が無かった。

この席上贈呈した寿像は伊藤競(糸二)君の幹旋による山本安曇氏の作である。なおこの先生還暦を祝って各方面から漢詩多数贈られたが、そのうち伯爵(当時)清浦奎吾氏のものを左に記す。

信山峻秀信川雄 靈氣天来朝夕通

不深先生風骨健 煙霞藏在栗籠中

賜杖翁奎堂

(清浦伯は元蚕糸業同業組合中央会々長、当時同会顧問)

寿像贈呈 昭和八年(一九三三)十一月千曲会代議員会において、針塚校長の寿像建立の件を決議し、翌九年(一九三三)三月寿像建立委員として林貞三(糸三)・児玉忠雄(糸二)・八木誠政(蚕三)・斎藤菊雄(蚕六)・上野栄仁(糸

三）君等を委嘱し、委員は千曲会理事その他と協議を重ねた結果、これが原型の製作を石井鶴三氏に依頼した。石井氏は直ちに來校して約一カ月間滞在し、校長室に日参していろいろ苦心研究の結果、寿像のポーズを決定し、その秋の日本美術院展覽会には、その胸像石膏作「肖像」を出品し、各方面から好評を博した。当時読売新聞は「最も傑出しているのは（院展出品中）石井鶴三氏の『老婦袒裼』である。（中略）私はこの作品と『肖像』（H氏）とを場中の双璧とするに躊躇しない」（相良徳三氏署名）と書いている。寿像の原型完成には一年二カ月を要し、これが鑄造を安部胤斉氏に依頼した。昭和十年（一九三五）十月十三日、その寿像が本校に到着したので、直ちに（旧）本館玄関右側に完成中の礎石に据付けた。この礎石の選定・入手・運搬・据付などには、地方のかたがたの一方ならぬお力添えと、石井氏の指導によったことを記して置く（山浦政氏追想文）。かくて同月二十一日本校二十五周年記念式典挙行日の午後二時半、針塚校長・御家族・來賓・千曲会員参列のもとに、科野大宮神社関神官の修祓に次いで、令嬢貞子さん（十五才）と令孫都丸敬介君（三才）の手によって除幕された。椅子に掛けて右手に毛筆・左手に巻紙を持ち、手紙を書かんとする姿勢の等身像だ。玉串奉獻者中には、作者石井鶴三氏・鑄造家安部胤斉氏も居られた。祭主千曲会理事長蒲生俊興君の式辞を左に摘記する。

（前略）明治四十三年上田蚕糸専門學校ノ創立セラル、ヤ特ニ挙ゲラレテ校長ノ要職ニ就カレ勤続二十五年以テ今日ニ至ル（中略）先生ハ至誠一貫蚕糸業ノ啓発ニ尽瘁セラレ特ニ教化ノ重点ヲ德育ニ注ガレ質実剛健真摯廉直ノ校風涵養ニ努メ実践躬行其範ヲ垂ル（中略）此ノ秋ニ方リ先生ノ功績ヲ広ク頌ヘ其高德ヲ後世ニ伝ヘントシ（中略）針塚先生ノ高德偉功ヲ欽仰スル寿像建設ヲ了セリ衷心慶祝ニ堪ヘズ（後略）

なおこの寿像製作について長期間親しく針塚先生に接した石井鶴三氏は、針塚先生を「平凡なる偉人」と称えたと云う（八木誠政君追想文）。この寿像建設の議が起った際、針塚先生は「自分の今日あるは多くの有能なる諸先生方の奮励協力

の賜であるから、自分の銅像など強くお断りする」と言われたことを附記する。しかしてこの寿像は太平洋戦争中（昭和十九年三月）当局の要請もあり、先生の御快諾を得て、戦争協力のため供出した。現在はその同じ場所に同じく石井鶴三氏原作（前記）の胸像が安置されている（昭和二十六年十月建設）。

**勲一等拝受** 昭和十二年（一九三七）四月十四日針塚校長は、宮中鳳凰の間において、総理大臣林銑十郎・宮内大臣松平恒雄氏その他侍立の上、勲一等瑞宝章御親授の榮譽を担われた。先生が明治二十九年（一八九六）以来実に四十一年の長年月に亘る我が国実業教育上に残された偉大なる功績の結果である。明治八年本邦勲章令發布以来この時まで、勲一等に叙せられた者三百二十数名、直轄学校長としては僅かに三、四名に過ぎなかった。先生の榮譽思ふべしである。これに対し学内においては四月二十九日天長節拝賀式後、午前十時から、勲一等拝受祝賀式を挙行し、井上教授祝辞の後針塚先生は「諸君の渝らざる援助御協力の結晶である」と申された。後日次の漢詩を染め抜いた絹縮緬の風呂敷を、学内教職員・傭員一同に贈与して感謝の意を表された。

#### 恩叙勲一等敬記張

天恩海嶽及微臣 豈敢頭幡為逸民

休問殘軀奉公事 常懷葵藿向陽心

**大日本蚕糸会恩賜賞** 昭和二十四年（一九四九）四月五日大日本蚕糸会から、同月二十七日に多年の功績を認められ、總裁の皇太后陛下から恩賜賞が下賜される旨の通知があった。当時先生はお体の調子が常でなく、歩行も困難だったので、己むなく缺席の通知を出し、当日は令息正樹氏が代理として出席し、明治記念会館にて、皇太后陛下より、この恩賜賞を拝受した。四月二十八日の日記には

總裁皇太后陛下ヨリ三組銀杯ヲ賜ハル外御菓子タバコ賞状ヲ拝受ス

とある。先生の胸奥には新たな感激の血液が湧き返り、早速大日本蚕糸会々頭吉田清二氏に対して、その礼状と、皇太后陛下への御礼言上を依頼している（正樹氏及び都丸ふぢ枝さん追想文）。

## 第四章 校長退官とその後の上田生活

### 第一節 校長退官

勲一等拝受の際、近親の人だちに勇退の内意を洩らされたが、千曲会その他の強硬な反対慰留によって「当分踏み留まろう」と言われた。しかしその節「桜花も散るべき時に散らねば物嗤ひだ。何事にも潮時があるよ」と低声につぶやくように言われた。翌昭和十三年（一九三八）三月二十五日の新聞紙上に「針塚校長辞表を提出」の記事が出たので、教官・千曲会員及び地元有志等協力して急遽留任運動を始めたが、時既に遅く、文部省は手続き進行中として、如何とも為し難かった。明治四十一年（一九〇八）八月蚕糸専門学校創立委員長として、本校生みの親であり、世界に類例の無い蚕糸に関する最高学府だったから、その創立までの労苦は想像に余りあったと思う。越えて四十三年（一九一〇）八月校長に任じ、創立当時の企画運営を一手に引受け、精勵刻苦、今日まで二十有八年、校基は固きこと磐石の実を示し、その間千七百名に垂んとする卒業生を斯界に送り、学者・技術者・官吏・経営者として、斯業のため至るところで活躍貢献を続けているのである。三月三十一日発令と同時に井上柳梧教授が、後任校長に任命された。次に針塚先生が当時の千曲時報に発表された「去るに臨みて」の全文を掲げる。

皆さん洵に長い間お世話になりました。十年を一昔と申しますが将に三昔にも垂んとする間よくも便々として御厄

介になったものだと思います。そして此間別段喧嘩もせず平和裡に愉快に学校生活を続け得た事を本当に嬉しく思ひます。之と申すも校内に於ては教職員各位が職務に精励せられ指導に研究に着々実績を挙げられ不断的努力を傾注せられて陰に陽に不肖私を援助庇護して下され生徒諸子亦学校の目的方針を休して真面目に学修の途に精進し校内に煩擾を醸さず、二千に近き卒業生諸君が亦一心同体となつて鞏固なる同窓意識の下に繋がりて正義に立脚して各其の専門とする養蚕製糸紡織の為に自分を尽くし一年一年に活動の天地を開拓して相續きて後進を導き学校の声価を高めて間接に学校を援助し延いて小生の立場を支援されたる賜にして誠に感謝の至りに堪へざる次第であります。而して亦学校所在地たる上田市を始めとして長野県の官民諸氏が常に当校の為に絶大の援助を垂れ学校の事としあれば万端に亘りて種々の便宜を与へられたるは均しく感謝して止まざる次第です。要するに約二十八年間と云ふ長年月間幸福に暮し得たことは畢竟之等各位各方面の御厚誼の賜に他ならぬでありまして此際私としては無上の感謝を捧ぐる次第であります。就中創立以来協心戮力日々苦楽を共にして二十数年間勤続せられたる元老職員各位と開校当時の数年間の学生諸氏の大努力に対しては本当に心から感謝致します。当時の学生は職員と共に全く学校の開拓者でありました。現在の桑園の大半や校庭に繁茂せる森の如き樹木は殆んど右の時代の職員や学生の手栽せるものであります。洵に思ひ出深きは等樹木や畑であります。

全校一致して創始時代に努力する間に自から平和の而かも親しみのある空氣が醸成されました。此の空氣が畢竟今日に至る迄こんなに長く小生が勤続させて貰つた原因の一つと思ひます。

も一つ長勤めの原因があります。それは当校の創立設計が余りにも杜撰不合理であつた為めです。此事は二十五周年式の当時の千曲会報に稍詳細に出しておきましたから略しますが要するに日本で始めて出来た学校である為めに創立委員にも確たる見当がつかず又各委員間の連絡統制がなく自然不完全極まる且つ小規模に失する設計となつたので

無理はないのであるが之を引受けた小生や職員達は随分困難に遭遇したものであった。之を世間人並の専門学校の規模に迄築き上げ様として乍不及驚鈍に鞭打って来たために何年経っても創立気分が抜けず遂に不知不識廿七、八年も経過したのであった。小生以外の他の元老職員も概ね之が原因で小生と勤続を均しくした訳である。徒らに屁張着いて居ったものでないことは一応他の職員の為に説明しておく必要を認める。当校が稍人並の学校らしくなったのはほんの近年のことである。一度出来た学校を改造拡張するの如何に困難であるかを沁々覚った訳でありました。努力の割合に効少ないことを遺憾に思ひます。

願れば私が当学校校長を拝命したのは明治四十三年八月十三日でありました。当時の文部大臣は小松原英太郎閣下で実業学務局長は工学博士真野文二先生で文部次官は岡田良平閣下でありました。之等各位の強力なる御勧めによつて不得止不肖を顧みず拝命致しました。差向き創立事務所を省内実業学務局の一隅に設け局員在原更議君、久保新吾君などを囑託として事務を開始し阿形先生を先づ聘して学則其他諸規程の起案を託し続て和田先生、大滝先生、石倉先生、勝木先生、三谷先生等を夫々相續いて聘し着々準備を整へ四十四年四月十七日授業を開始したのであります。続て井上先生を将来任用の準備として海外留学をして貰ひました。物理氣象の担当として築地宣雄先生及原田先生を、養蚕部の先生として北島鉞雄先生等を順次聘したのであります。築地先生は唯今航空氣象の權威者として中央氣象台に活躍し北島先生は現在鹿児島高等農林学校の養蚕科主任教授であります。爾來職員の出入も相當にあり既に故人となられた方々も数名ありますのは当然と思ひます。其故人の中には三吉米熊、勝木喜童、村井博揚、三谷徹、高橋清七、金子英雄、田中定雄、田袋裕英、新樂金橋、小沢綱吉、小山滋等の諸先生及事務員を数ふるのであります。当校は之等諸君に負ふところ頗る大なるものがあります。就中三吉先生は小県蚕業学校長より当校に兼務し創立委員の一員として大に尽力せられ、各教官の着任の際には住宅の斡旋等に就ても大に先生のお世話を煩はしたものです。

深く感謝の意を表する次第であります。

校庭の樹木は一々歴史を有するものでありますが、特に玄關前に亭々として繁げれるシーダーは、今上陛下のまだ皇太子殿下で在らせらるゝ時当校に行啓せられて御親裁の栄を賜はった光栄の記念であります。当校庭内の諸所に点在せる楓（樺）は二、三の職員と共に大星河原散策の途次神社境内の芽生を抜き取り新聞紙に包みてポケットに入れて持ち帰り栽培したものであります。今や之等の樹木は一抱に余り無限の生気を湛へて繁茂しつゝあるが植ゑた人々は已に皆半白の老人となりました。又感慨なき能はずと謂ふべきか。学校の業績は格段のことはないが之等は程度の問題で何とでも謂ふことが出来るが先づ相当の成績を挙げたと謂ふことが出来る。然しながらこれは世間並の言であつて我校の理想否我校職員の理想から言へばこれが達成には遙かに遠きものがあることは洵に遺憾の次第で畢竟余の微力の罪は免るゝことは出来ない。此点は謹んで謝罪するものである。

今二十八年間勤務せる当校を去るに臨み感慨無量のものがある。思ひ出は尽きぬが記憶の一端を記し教職員各位に對して満腔の感謝の意を披瀝し弥々各位の御健康と御發展とを祈り併せて校運の弥々隆昌ならむことを祈る。尚終りに臨んで一言したきは余の後任として新校長井上先生を得たことである。御承知の如く井上先生は創立以来一意専心校務に將た攻學に精勵せられ其の功績や実に多大である。所謂徳學兼備の紳士である。此人に校長を譲ることを得たるは学校の爲めに洵に幸福とするところであつて又余の大に満足し且つ感謝するところであると言ふことである。親愛なる千曲會員諸兄よ。願はくは大声上田蚕糸専門學校万歳を三唱せられんことを。上田蚕糸専門万歳……（千曲時報昭和十三年四月二十七日号）。

四月十七日午後六時上田市公会堂で、教職員及び全国千曲會員の針塚前校長・井上新校長の歡送迎會を開催した。蒲生俊興（蚕二）教授の歡送迎の辞、針塚・井上両先生の御挨拶があり、全くの水入らずで、越し方行く先の歡談が続き、

七時半頃和田仙太郎先生の発声で「新旧両校長の万歳」三唱、大滝照太郎先生の「上田蚕糸専門学校万歳」、針塚前校長の「万堂の諸君万歳」があつて散会した。

なお針塚先生退任に伴い、多年の功勞により、四月二十二日附特旨を以て位一級を進められ、正三位に叙せられた。

## 第二節 謝恩金贈呈

新旧学校長歡送迎会の当日、千曲会總會において「針塚長太郎先生謝恩記念資金募集の件」を万場一致で決議し、直ちに募金に着手した。次いで同年十一月二十三日千曲会代議委員会において、針塚先生謝恩金贈呈式を行ない、蒲生千曲会理事長から謝恩金目録を贈呈した。これに対し針塚先生は「二十五周年記念において肖像を建立して頂いた事で既に過分に思っていたのに、今回退職に際して謝恩の企てあるを聞き、絶対に見合はして呉れと言ったが、御懇情の厚き斯くの如き結果となった。私としては拝受するに堪へぬ。然し今直ちに辞退するは失礼に当る故、兎に角頂戴する事とする。衷心から感謝の意を表する次第である。幸ひ身体は丈夫だから、今後諸君の命令あれば、及ばずながら残軀に鞭打ち、蚕糸業のため、同窓のため、働く考へである。何分よろしく」との謝辞があつた。追つてこの謝恩金は御郷里の新居建設資金に当てられたと言う。

## 第三節 針塚賞

「針塚先生謝恩記念資金」中から金三千円也を千曲会に寄附されたので、これと同金額を千曲会基金中から支出して、總計金六千円也の「針塚記念基金」を設定し、主としてその金利により、「針塚賞」を授与することに決定した。始めその授賞範圍を、卒業時に成績優秀な学生及び千曲会員中著名な発明考案・発見・研究等、功績顕著な者と規定した。



当時学生に対しては文部省の実業振興会から、毎年一名の授賞者があつたから、針塚賞はこれと釣合いを保って、優秀学生各科一名ずつに授与した。卒業生に対する授賞は、審査員会を設置し、千曲会各支会の推薦者から審査決定することになつてゐた。しかしその後大学昇格と共に、卒業時の成績順が発表されないこととなり、一面貨幣価値の激変もあつて、授賞を中止し、現在に及んでいる。

#### 第四節 校長退官後の上田生活

昭和十三年（一九三八）四月二十二日特旨を以て位一級を進められ、正三位に叙せられたことは、前に述べた。又同年五月十八日上田蚕糸専門学校名誉教授の名称を得た。これより先昭和十二年（一九三七）三月信濃教育会々長に就任してゐたので、従来よりは自他共にその方面に時間を割き、又割かされた。もともと明治二十九年（一八九六）大学卒業以来、殆ど文部省関係の教育・教科書部門を歴任し、同三十五年（一九〇二）九月早くも文部省視学官に任命されて、全国の小学校・中学校の教育実情を視察調査し、指導して来た。上田蚕糸専門学校長に任官しても、学生の人間としての教養を最も重視・尊重して来たことは、前に述べた。校長在任中衆望に迫られて、一時上田青年会連合会長の職にあつたこともある。教育県として全国に知られた長野県ではあるが、当時日に日に急迫する時局下において、青少年教育の進路目標を決定指示する重要性を痛感してゐた先生は、単に学内ばかりでなく、時に応じて、一般学外にも、その指導力を及ぼしてゐたのである。信濃教育会の総会などでも、時局柄よく会員の喧々諤々の意見を静かに聞いて、取るべきを取り排すべきを排してこれを纏め、かつてその信念に戻らなかつた名会長振りが、今に称えられている（塩沢隆平氏追想文）。

校長退官直後即ち昭和十三年（一九三八）五月上田市長推薦問題があつた。当時の上田市局は成沢伍一郎市長始め

時局に應えて、上田市の軍都化を強力に推進した。然しそれが運動費の問題にからんで、軍都化反対運動が市議員間に擡頭し、市長も四囲の情勢上辞職の己むなきに至り、後任市長に市議会満場一致で針塚先生推薦を決議した。市会の三派はそれぞれ代表者を選び、三人連れ立って先生宅を訪れ、市政の現状を説明し、先生の市長就任を懇請した。先生は「近く郷里群馬県に引揚げるから」と、これを軽く断った。「針塚市長」の声は全市を包み、市議員も全員三十名揃って先生宅に押しかけ、坐り込み戦術の強談判だ。先生から「近日中に可否の回答をする」との言質を得て、不承不承引上げた。そして先生の側近・千曲会などにも猛烈な働きかけを続けたが、数日後千曲会幹部たちが、市会議長を訪ね、「針塚先生は遺憾ながら各位の希望に添え得ない」旨を告げ、「針塚市長」問題に終止符を打った。

一方卒業生その他の訪問は、更に繁くなり、揮毫の依頼多く、特別用事の無い限り、先生は殆ど毎日学校に足を運び、前の物理室で、例の達筆枯淡な書を、楽しみ味わいながら、静かに書いていた。正村竹亭氏についての南画修鍊にも一層身を入れ、これを画くのを楽しみにしていた。

こうした平和な雅趣に満ちた上田生活も、郷里群馬県の生家近くに新築中の住宅が完成したので一応打切ることとなり、昭和十五年（一九四〇）五月四日午前十一時三十五分上田駅発の汽車で、上田駅未曾有の、多くの人々に見送られて、三十年来住み慣れた上田の地と別れたのである。しかし、その後も、信濃教育会や専門学校などに、公私の所用が多く、しばしば来校され、その機を待っていた人々に、書画の揮毫することが多かった。

## 第五章 帰郷とその後

### 第一節 帰郷

村を挙げての歓迎 洪川駅には村長始め多数の村人たちが、村旗を先頭に構内を埋め尽くして先生を迎え、心から歓喜溢れる情景だった。「予言者郷に容れられず」の古言の逆だ。ここにも石井鶴三氏の「平凡なる偉人」の真姿が見られた。小雨が降っていたので、車を用意してあったが、先生はこれを断わり、一同と共に村の鎮守早尾神社に参拝して帰郷を報告し、新居の玄関前に整列した一同に対し「故郷を出てから丁度五十年振りで帰って参りました。その間すっかり御無沙汰に過ぎましたが、今日唯今から、亡父の訓えに従って墓を守り、百姓に戻りますから、よろしく御交誼のほどをお願いいたします」と挨拶された。先生はかねがね側近の人たちに「僕はやがて家に帰って芋を掘り墓を守る」と言っていたが、村人たちに対する帰郷第一声は、それであった。

**墓守りの真情** 前記父喜惣治氏記載の先生学費控を見ての最後に

児は親のふみ来りたる路をふめば間違ひありません実践躬行は本当によい教育です。私は本年六十七才です。今夕此の手帳を拝見して感恩の念に満ちて之を書きました。

昭和十二丁丑三月十九日

針塚長太郎

上田市松原町五五三九

と、親の恩に対する感激の情を披瀝して居られる。従って帰宅第一步に墓参して帰郷を報告し、次の詩に託して所感を述べている。

委身教学ニ不遑<sup>レ</sup>旋 風樹引愁三十年

衣錦承恩歸郷日 白頭一哭墓門前

又晩年（昭和二十二年四月二十七日）の和歌に

大かたの世のうきことは忘れてもゆめ忘れめや親のめぐみを

とあり、還暦祝賀会の壇上において、「この祝賀式の模様を、今は亡き両親にお見せしたかった」と涙に咽ばれ、暫し言葉の無かったことは、前に述べたが、更に昭和二十四年（一九四九）即ち御逝去の年の六月三日の日記には親の鴻恩海よりも深しその一端をも報い得ざりしをまことに申訳なしと思ふ、今にして感慨無量なりと、誌してある。かくして常に孝養の極致としての墓守りに、その真心を捧げていたのである。

**帯経草堂** 先生は帰郷後その新居に「帯経草堂」の庵名を附せられた。これが出所の原典を左に記す。

。以郡国選諸博士、受業孔安国、貧無資用、常為弟子都養、時行賃作、帶経而鋤、休息輒誦（漢書見寛伝）

。常林少單貧、性好学、漢末為書生、帶経耕鋤、其妻常自餽餉之、雖在田野、共相敬如賓（魏略）

。就郷人席担受書、勤力不怠、居貧自躬稼穡、帶経而農、遂博綜典籍百家之言（晉書皇甫謐伝）

即ち先生帰郷後の日常とその心境とを、最もよく表現した名称である。

## 第二節 奥様の死去と肉親の不幸

奥様ノブさんは昭和十七年（一九四二）二月二十五日虫垂炎から腹膜炎を併発し、前橋の病院にて逝去された。戦争酷な際で、物資薬物の缺乏甚だしく、十分の手当も不可能な時期だった。死体に取りすがり、声を挙げて号泣されたと言う。先生の痛恨は想像に余りある。次に先生の挽歌をあげる。

## 亡き妻を偲びて

今更にこころやさしき亡き妻を偲びてわれはさみしかりけり

今よりはやさしき妻の心もて我は代りて子等をもらまし

さきだちて逝くべき我を後にして妻は去りけりわれはさびしも

前に述べたように若くして先生と結婚された奥様は、終始「夫と言うよりは先生です。何でもすべて親切に教え導いて呉れます」と感謝していたとのことだ（奥様令妹伊東かうさん談）。幼時から厳格な家庭の修練を受けた先生が、それについて「これは私の生涯の幸福でした」（前出「思ひ出の記」と述べられているが、これを承けて先生の御家庭も相当厳格だった（正樹氏追想文）。そうした家風の雰囲気溶け込むまでの奥様の気苦労も大変だったろうし、お子様も多く、卒業生・在校生その他の訪問客も繁く、これ等に対する先生特別の配慮は、奥様の手を煩わしたことが多かった筈だ。先生の挽歌はその間の真情を、よく発露している。なお奥様葬送の後日、上田から阿形・石倉・佐藤（利）・蒲生・林各教授の奥様たちが、連れ立って豊秋村（現渋川市）に参られ、その霊前に参拝すると共に、先生を慰問申し上げた。

その後先生の日常をよく世話された三女ふぢ枝さんの夫都丸晴治（蚤丸）君と末娘貞子さんの夫野口七五郎氏が出征して戦死し、終戦の年の暮その貞子さんも腸チフスで死去された。令息二人も上田で亡くしていられる。奥様が亡くなつてから先生の老いが目立って来たと、令息正樹氏も言っているが（追想文）、宜べなるかなと言うべきである。

## 第三節 晴耕雨書

農作業 少年時代から精農家の父に従って農作業のすべてを躰得していた先生は、上田学校時代にも、創立当初は自ら率先して桑園の造成を指導し、その後も終始農園の実態にはよく注意されていた。校庭内の除草など、教職員や学生

等に先んじて、実行していたことは、いまだに上田方面の語り草になっている。また上田の自宅では自ら農園を耕作して、野菜を栽培していた。帰郷の際は戦時体制下の食糧不足時代だったことでもあり、先生及びその御家族たちの農業は、全く本格的なものだった（針塚正樹氏及び都丸ふち枝さん追想文）。そして先生は家族の人々にも、喜んで自ら農作業を行なうよう仕向けられた。参考のために御逝去の年の昭和二十四年（一九四九）七、八月の二カ月間先生の農作業（庭その他の除草も加える）日数を拾って見ると、酷暑の候で、しかも先生の精力漸く衰え、「静養」（八月二日）、「神経痛起る」（八月六日）、「終日臥床」（八月七日）などの障害がありながら、実に三十五日を数えられるのである。例えば

七月一日 蒿<sup>（わしや）</sup>の側ニ竹ヲ添フ らっきよう収獲 ちしやニ棚ヲヤル

〃 二日 ゴマ間拔キ

三日 小麦脱穀（家内中）、ゴマ間拔キ完了

〃 四日 小豆下種 茄子補植

と言う如く、実に手まめに動いていられる。なおこの月の十六日には「蒔畦作り」「陸稻除草」をされたが、その時の感懷を

朝涼<sup>（あさ）</sup>を一鍬打つの心地よさ作物しげる夏の畑にと、明朗新鮮な和歌に託されている。これは偏えに先生の一生を貫く土と植物（作物）とに対する熱愛と、流汗鍛錬・実践躬行とを最後まで具現された貴重な教訓である。

揮毫 上田時代も多忙の寸暇を割いて、よく扁額や軸物・碑文を書いたが、帰郷後も遠近からの依頼者が非常に多く、しかも悉くこれを引受けて、書き続けた。二十四年（一九四九）八月一日から御逝去の九月二十一日までの揮毫は碑文から画讃に至るまで、十五点の多きに達している。特に碑文の如きは先生自ら長い案文を作成して、それを依頼者に送

り、その承諾を得てから揮毫している。当然の手順とは言え、その煩瑣な労苦は、想像に余りあったと察せられる。

八木原（土地の名）石本ニ歌ヲ書キ送ル

これは九月二十日御逝去の前日である。こうして最期まで、聖賢の教典を書いて世道の振作を期し、先人の靈を祭る碑文によって、孝養心の作興を援けられたのである。

#### 第四節 喜寿の祝賀

昭和二十二年（一九四七）十一月二日針塚先生喜寿の祝賀を、同窓生主催のもとに、豊秋村（現淡川市）の先生お宅で開催した。卒業生の外に地元・村長・農会長・母校上田繊維専門の佐藤利一・林貞三両教授・井上柳梧上田市長など、会する者約二百名であった。御近親・御家族も列席せられ、お孫さん・お子様が、それぞれ祝品を贈られた後、針塚先生喜寿祝賀委員長織田博（系二）君から、記念品を贈呈した。それは予ねてこの祝賀委員会が募集した記念資金による各種防寒着と補聴器であった（都丸ふち枝さん追想文）。先生は「感謝一ぱいで何も言い得ない」と言われたが、次に一般に差出された挨拶状を記す。

謹啓向寒の砌益々御清栄に被亘慶賀の至りと存上ます

扱て此度は小生の為め時節柄にも不為拘万障を排せられ喜寿祝賀の会を御催し被下甚大の御配慮を御煩はし結構の記念品まで頂戴仕り誠に難有勿体なき次第にて何共御礼の申上げ様も無之只管感謝あるのみであります（以下略）

又左記の如き先生喜寿を詠める漢詩・和歌がある。

昭和二十二年丁亥、余年正七十七、身軀猶健、日々躬耕、榛山之陽秋十月及門諸君来而祝寿、開賀宴于茆屋、会二百名余何辞謝之即賦而道謝

七十七翁身保柔 帶經襲畝日耘耰 如今勿問人間事 我是榛山老沐猴  
諸君賀壽苦無辭 慙愧老來如小兒 猶有心中倖一事 共看四海太平時  
無為老廢豈當賀 況是邦家途坎珂 唯賴諸君再造勞 俟看天日暗雲破  
七十七年無可尋 老遭陵谷最傷心 余生只合混猿鶴 榛嶺之陽刀水陰  
官途尽處是青山 此境堪倫甌北閑 何幸諸君時眷顧 能教野老忘貧賤

喜寿越えて跡見かへれば瞬く間に光陰は箭の如きかも

世の常の道を辿りて喜寿を越えあと見送りてわが無為を恥づ

喜寿をへて跡見かへればあやまちて後悔ばかり足らぬ身なれば

なお元教授和田仙太郎先生は次の如き針塚先生喜寿の祝歌を贈呈している。

よろこびの御年むかへてさちおほくのち長かれいよよますます

ここにして鶴亀をうたひ鶴亀のめでたきよはひ君にいのれる

長距離の大選手なりし君ならで誰か越えつべき百年の坂

みなしこのうまごはくむ喜寿翁守らせ給へ天地の神

なおこれより先き、千曲会群馬支会が中心となつて、針塚先生喜寿祝賀委員会を結成し、織田博（糸一）君委員長に任じ、岡部弥平（糸三）・橋本景吉（糸四）・浜井寿夫（蚕二）君等が中心となつて、千曲会員及び全国の関係業者などに呼びかけて、資金を募集し、記念贈呈品を予め決定して準備し置き、一方拠金者全員に対し、謝礼として先生の書と最近の御写真とを送ることとし、既にこの年の八月一日から揮毫を始めて頂いた。更に祝賀日の近づくを見て、会場た



る先生お宅の、戦争による破損の修理等に至るまで、千曲会群馬支会及び主として前記四君の尽力が大きかった。そして記念品の外に現金壱万五千元也を贈呈したが、先生は内五千元也を、上田繊維専門学校昇格運動資金に寄附された。

## 第六章 一世の師表針塚先生

### 第一節 趣味即人間造成

日本刀 その鑑定や名刀の入手には本校大滝照太郎教授の誘導斡旋によるが多かった。日本刀そのものに興味と魅力とを懷いたのは、既に青年時代からのようだ。その後多年年末ボーナスの半額以上は刀剣代に当てられていたと言ふ。そして在学中武道精神の錬技に精進した学生に対し、しばしば記念品として日本刀を贈与している。武道と共に日本精神の象徴としてである。戦争中は能く出征の卒業生に愛蔵の日本刀を餞けして、共に皇國の危難に奉仕させた。終戦後の国情變化に際しても

敗戦後憲法改正、戦争抛棄ヲ声明シ刀剣ハ無用ノ長物トナリタル如キモ日本刀ノ徳ハ如此者ニアラズ 心ノ鏡トシテ日本男子ノ魂トシテ永久ニ大切ニ珍藏スベキモノナリ（昭和二十一年十一月二十三日）  
と言われ、これを次ぎの句の説明理由としている。

慾をたちつるぎのやうにすがぐし

又「昭和二十一年（一九四六）十一月ヨリ」の雜記帳の巻頭扉に

よくを太刀つるぎを己が鏡にて

刀剣は永久に愛護せよ 家宝として又国宝として実用の有無を以てなすなかと記してある。又雑記帳の裏面には

刀剣は国宝なり逸散すべからず（正樹に献ず）

と正樹氏への遺言の形で記されている（正樹氏追想文）。即ち針塚先生の日本刀愛好の根本精神は、伝統的日本精神の象徴と、これによる日本民族固有の人格修養とにあったことが知られる（猪坂直一君追想文）。

書 少年時代から書が好きだったことは前に述べた。書道の錬磨は一生を貫いて渝らず、暇さえあれば筆硯に親しみ、毎日幾通と書かれる書簡には、必ず毛筆を用い、又よく机上に指頭で筆法を描いていられた。顔真卿を習ったと言うが、後年には全く独特の枯淡な境地に到達している。揮毫の際は精神を統一して、無我の境地に没入し得ると共に、揮毫の文言筆勢による一世の教導を、目図していたようだ。依頼者に直接手渡しする時は、その語句を朗々と吟誦し、意味するところを詳細説明されることが多かった。そして機に臨み人に応じて与えられた教訓の真意が、殆どその語句に集中要約されるのを常とした。従って多くの人々は、先生の書を書齋又は応接間に掲げて毎日これを拝読し、師の恩を新たにすると共に、先生の聖訓に一生違わざらんことを期している。

画 俳画は早くから描かれたが、上田市正村竹亭氏に師事して、南画を書き出したのは、上田時代の晩年になってからだ。最初は和田仙太郎教授の紹介だったが、余り気乗りせず、四君子（蘭・竹・梅・菊）の手ほどきを受けたが、次第に興味を覚えて練習の回数も多くなり、よく大晦日の晩用事を済ましてから竹亭氏を訪ね、一年の俗塵を払い落した気分分、画筆に親しんだと伝えられる。昭和九年（一九三四）頃から殆ど毎週月曜日の晩に、竹亭氏を自宅に招んで、南画の習練を積んだ。その席上には奥様はじめ何時も数人の学生が同席して、先生と共に指導を受けた（中島真君追想文）。絵は人間の静動を的確に描出されるからとて、人にすすめられた。そして口癖のように「もう十年早く始めればよかった

た」と繰り返された。こうした竹亭氏についての画習は、上田を引揚げるまで約六カ年続いた。「書」と同様無我の境に没入し、且つ東洋芸術の特質たる枯淡の味いを満喫出来ると、言っていられた。上田の晩年には四君子の外に犬・猫・鶏・牡丹その他の画題を巧みにこなして、鮮かに描かれたが、故山に帰られてからは一層頻繁に他の需めに応じて、その数は「書」と共に測り知れないほどに達した。「蘭」の讀には「幽人之貞」「幽蘭生絕壁」、「竹」には「君子之節」「瀟洒出塵姿」、「梅」には「暗香襲人」、「菊」には「清節独高」などを、よく用いた。竹亭氏には終生師事し、時に作品を送って教を乞うた。例えば昭和二十三年（一九四八）十一月二十三日「竹亭先生ニ竹ヲ書イテ送ル」とメモしている。

謡曲 開校間もなく針塚先生を中心に、教職員を会員とする謡曲の羽衣会が結成された。それは観世流で、師匠は川中島に近い東福寺村の高橋清輝氏であった。最初の会員は針塚先生の外に、阿形輝司・和田仙太郎・石倉新十郎各教授・小沢綱吉庶務課長等であったが、その後次第に参加者が増し、一方針塚先生夫人を始め、阿形・石倉・遠藤・早川教授夫人等が、羽衣会婦人部を作って一層盛んになり、時に大会を開いて競演した。正月の謡い初めには、先生の謡曲に奥様の仕舞は常例となった（正樹氏追想文）。謡曲・能は日本特有の伝統的芸術であり、針塚先生がこれを愛好されたことは当然であろうが、先生の意図は、外にこの繊細優美な芸術を通じて、教職員間及びその家族との、高く美しい融和協心にもあったことは確かである。

漢学・漢詩 少年時代から漢学は興味をもって修得されたようであるが、儒教特に孔子に傾倒され、母校における修身の講義は、主として論語を中心としたもので、揮毫もこれに関する文言が極めて多い。これは終生一貫した事実ではあるが、晩年には菜根譚の探究から、老荘の学に入って行った。昭和二十一年（一九四六）五月の手記には

菜根譚の左の句日常の行為に於て大に味ふべし

休下与二小人一仇讐上 小人自有対頭 休下向二君子一諂媚上 君子原無私惠

寧<sub>レ</sub>為<sub>ミ</sub>小人所<sub>ニ</sub>忌毀<sub>一</sub> 母<sub>レ</sub>為<sub>ミ</sub>小人所<sub>ニ</sub>媚悅<sub>一</sub> 寧<sub>レ</sub>為<sub>ミ</sub>君子所<sub>ニ</sub>責修<sub>一</sub> 母<sub>レ</sub>為<sub>ミ</sub>君子所<sub>ニ</sub>包容<sub>一</sub>  
とあり、又二十二年（一九四七）六月十日には

此頃老莊の思想と道教に興味を覚えて耽読す

と記してある。同じ頃碧巖録を読み、佳言適章を摘記し置いて、これを反復吟唱し、時にそれ等を揮毫の語句に用いている。

又漢詩も夙く自得し、時に臨んで「榛嶺」と署名して自賦を発表し、古今の名詩を引用している。喜寿賦は前に述べたが、次に「悼今井五介翁」二首を記す。

興<sub>ニ</sub>隆糸業<sub>一</sub>克<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>仁 偉績多年有<sub>レ</sub>孰倫<sub>セン</sub>  
妖霧冥々蔽<sub>ニ</sub>天地<sub>一</sub> 何堪<sub>ニ</sub>重復<sub>一</sub>哭<sub>ニ</sub>伊人<sub>一</sub>

多歲欽<sub>ス</sub>君<sub>ガ</sub>海内名 何<sub>ヲ</sub>図<sub>フ</sub>今日隔<sub>ニ</sub>幽明<sub>一</sub>

賦<sub>レ</sub>詩遙<sub>ニ</sub>寄<sub>ス</sub>白頭哭 泉下有<sub>レ</sub>靈知此情

詩友に竹雨土屋久泰・南村笠井輝男・東泉沢田聰清の諸氏がある。晩年帰郷後交友更に密を加え、時にこれ等の詩友は相携え、帯経草堂を訪れて詩談に時を過ごし、又それぞれの自賦を贈って、先生の詩情を慰めた。

両毛、大野望中平、一路南薰入<sub>レ</sub>袂清、  
来過<sub>ニ</sub>榛名山<sub>一</sub>山下舍、白頭高士帶<sub>レ</sub>經耕<sub>ス</sub>

訪榛嶺先生即呈

竹雨

帯経莊外一望平、緑樹風薫胸宇清。  
嬰鑠先生談更涌、窓前禽鳥和農耕。

訪樸嶺先生 次竹雨先生韻詩

東泉沢田聰清

これは太平洋戦争の終戦直前昭和二十年（一九四五）七月二十四日来訪賦されたものである。世相急迫の極だった当時、先生の生活がそのまま詩化されている。

武道 これについては前に述べたから省略する。

## 第二節 自然への愛着

校庭の樹木 少年時代から農作業に励み、田畑の作物を愛護し、その成育と収穫を楽しんだことは、前に述べた。かくて先生の植物愛護の精神は一生を通じて渝わることなく、その結実の好適例は、現在の信州大学繊維学部構内の鬱蒼たる大木である。これについては前記「思ひ出の記」にも述べているが、次に学校「創立二十五周年回顧感想録」を記そう。

（前略）（創立）当時の記念物としては本館の玄関前にある二本の樗及び雨天体操場の側並に生物教室の南にある数本の樗である。それは大星河原に数名の教官と共に散歩せし時に芽生えを抜きて紙に包みポケットに入れて持ち帰り移植したもので本年で丁度二十四年を経過せるものである。校庭の柿は約二十年前和田教授の郷里会津より和田教授の父君の斡旋によって取寄せ植栽した身不知柿である。校内周囲の胡桃は大正天皇御即位の当時小生が寄贈を受けて植付けたものである。（後略）（千曲時報昭和十年十月十五日懷古号）

かくて今日構内に亭々として茂る一木一草は、何れも先生の愛の結晶である。かつて占領当時米国の教育指導者が当校を視察された際校庭の鬱然と茂る樹木及びその配置を眺め、「信濃路に入ってこの上田を見、始めて大学らしい風格に接した」と激賞した（佐藤春太郎先生追想文）。庭内の樹木には当時名簿があり、場所と名称・植付年月日が記入されていた。従って必要己むを得ず伐採する場合は、一々校長先生の許可を要した。農場の野溜の上に柿の木がかぶさり、学生がその実を取りに上って、屋根を損ねて困るので、柿の木を伐らうとしたら、「先ず学生を諭せ、屋根は修理出来るが、木は切ったら決して復らない」と言われた（倉沢美徳君追想文）。こんな時先生はよく「草木を見よ、そしてその正直さと作為なきを学べ」と語られた。

帰郷されてもこの精神は一貫して、体の不自由な酷暑の候でも、前に述べたように、作物や庭内の除草は続けられた。逝去の日の午前も除草をなされたと、家族の方や近所の人が言っている（都丸ふぢ枝さん追想文）。開校当時桑園造成の際の教訓「汝草を滅せずんば草汝を滅すべし」（矢沢茂登二君追想文）を、最期の日まで実行されたのである。また二十四年（一九四九）の春柿の接木をした際

実らなば誰か食ふらめ柿つぎて只活着をわれは楽しむ

みのりなば誰か食ふらめ我れは唯つぎ木の柿のつく（活着）を見んとて

と詠んで柿の実を食べるよりは、接木の活着を楽しむ、即ち柿の木そのものを愛する精神が発露している。柿の実は非常に好物で、よく「果実の王だ」と言っておられた。

犬と猫 犬も猫もお好きだった。それも種類とか毛並みとかには全然お構いなく、野良犬・野良猫も、先生の門を入れれば絶対に安全だった。宴会にはよく犬の御馳走を紙に包んで、持って帰られた（倉沢美徳君追想文）。上田引揚げの時も「テリヤは箱に入れられてお勝手道具の間に積み込まれた」（石倉新十郎先生千曲時報昭和十五年五月二十日「前校長さんの

転宅」(佐藤利一先生追想文)。

この生きとし生けるものへの愛情は晩年まで変わることなく、昭和二十四年(一九四九)六月十一日の日記には「猫ヲもらふ」の一句があり、「喜寿の翁猫と一緒に日南ボコ」もその時の句だ。この猫が後に先生と同床して、その御最期を見送ったのである。また同年七月十一日には、

犬猫も一っしょに飼へば睦み合ひけんくわもせずに遊びたはむる

と実情を詠んでいる。

山 自然の愛好者たる先生は、また当然に山の愛好者だった。

井上柳梧先生を始めとし、同好の教職員を同行して、信州の山々の多くは、先生の足跡を印した。少年時代から鍛えられた健脚と、「進んで難局に当れ」の精神で、常に先頭に立って同行者を率いられた。時に道無き道を勇敢に攀登って、同行をはらはらせることもあった。そして頂上でよく次の詩を朗吟された(井上柳梧先生追想文)。

青蓮一去逸才稀 誰復登高能賦詩

世界三千帰掌握 鵬程九万可風追

人間草木未生処 天上神仙来会時

為報東西漫遊客 不攀大岳莫談奇



燕岳にて(大正14年夏)

この詩は、印刷された先生最後の文章と言われる「常陵」（一九五〇）寄稿「学生諸君に寄せる」にも引用され、「清潔なる空氣、絶美なる御花畑、雲海、御来光、峻峯、唯だ絶賛の嘆声を洩らすのみであります（中略）。支那の詩聖李白は登山の愛好者だったと見えて、湖山の詩（前掲）があります。実によく高山の気分を出して居ります」と言っている。又土屋竹雨賦の

眼前千里、水、脚下万重、山

大道無通塞、独行、天地、間

を愛誦された。氣宇洪大にして、山頂の感興を能く表現しているからだ。なお先生の雅号「榛嶺」は、幼時から先生を育んで、その英峯を夢寐にも忘れなかった榛名山から取られたことは勿論である。孔子は「智者樂水、仁者樂山」と言ったが、先生は水にも樂しまれた。

### 第三節 友 愛

上田専門學校を中心として 昭和十五年（一九四〇）五月先生が御家族と共に上田を去られる時「決して上田を去るのではない、心は今まで通り上田に留まる」とのお言葉に従って、公式の送別会はすべて取止めた。上田に居られること三十年、公的な仕事の大部分は、この間に為されたし、引揚げ後も残務的なことや、揮毫の依頼なども引続いたので、時折上田に足を運ばれた。しかしそれとは別に、先生の心身の大きな部分は、最後まで専門學校及びその教職員・卒業生、上田を中心とする長野県地方の人的・地理的事象に結びついて離れなかったようだ。昭和二十三年（一九四八）四月二十五日、当時既に足の関節が悪く、外出には必ずリヤカーに乗って居られた先生が、中島真（蚤二〇）君の迎えを受け、不自由な体を長野県須坂に運び、高水社元理事長宮沢貞助氏の頌徳碑除幕式に列席した。その碑文は先生の撰書



によるものだ。式後の招待会や同窓会等々、引続きの催し物で四泊五日、二十九日永井真吉（蚕一八）君等に渋川まで送られて帰宅した（中島真君追想文）。御家族の心配を否定し、些かの疲労も顔色に出さなかった。翌二十四年（一九四九—御逝去の年）七月以後の日記（毛筆で毎日一行から三行位までの短記）には

。母袋東平氏の死去ヲ報ジ来ル

。岩崎喜三郎氏にハガキを出す

。石倉君に玉チシャの種子ヲ送ル

。和田仙太郎氏に玉チシャ種子ヲ送ル

など、連日又は隔日位に、学校関係者・卒業生又は上田方面の人々と、通信連絡している。南画の正村竹亭氏との文通も繁く、

。正村先生ニ返事ヲ出ス（依田村上野正美氏ノ祖先ノ碑ノ件）

。竹亭先生ヨリ碑面紙ヲ送り来ル

。墓碑書ヲ竹亭先生ニ送ル準備ヲナス

などあり、前年十月二十四日には「竹亭先生ヨリ画帖ヲ返送ス 御自筆ノ画及宣長大儒の歌ヲ贈ラル」とあり、又

九月四日 石倉氏ニ見舞ノ返事ヲ出ス

九月七日 遠藤保太郎氏ニ南画講義録と画ト共ニ全部呈ス

と記してある。これは翠雲画伯の講義録で先生としても貴重なものだったろう。又八月二十二日「角田恵重氏ヨリ古稀百吟二部贈り来ル 一部ヲ飯島正胤氏ニ送ル」、同三十一日に「和田仙太郎氏ニ古稀百吟ヲ送ル」とあり、教職員だった人々や卒業生は、最後まで先生の念頭を占めていたのだ。一方この年の五月十八日「信濃教育会宛ニ守屋先生遺稿へ

ンサン委員会ニ所感ヲ送ル」と書いてある。

親戚と地方旧知 五十年振りで帰国された先生御一家に対し、親戚や地方旧知の人々は、何等の隔たりもなく自由に訪ねて、食糧品を手土産にしたり、揮毫その他を依頼したりしている。先生またそれを心から喜んで迎え、茶を汲み食事を共にして談笑し、時の移るのを忘れた。除草や畑仕事に出ている際、村の人々が通りかかると、晴やかな笑顔で「遊びにいらっしやい」と、決して声をかけられた。こうして先生に対する近親感と尊敬の念とは、期せずして近隣に響き渡った。親戚の人々に対する晩年の日記には

。奥泉渡君そば一箱ヲ持参シ訪問セラル

。中里剛来ル 中里剛ノ為色紙二枚書ス

。都丸真君関口忠造君来、真君ヨリ茶菠薐草 忠造氏人参ヲ持参ス

。山本誠一氏来訪

。伊東かうニ端書ヲ出ス

。宇高氏来訪セラル

などの文句が随所に見られ、又旧知の人々についても

。伊藤虎次郎氏 大谷惣三郎氏 関口文平氏来訪

。敬老会ニ招カル（撮影）多数来会ス

。大谷惣三郎氏来 板東橋渡初ノ記念軸物ヲタノマル

のように記入してある。部落の老人会（七十才以上）には毎回出席し、心おきなく懇談して、会する者を慰め合い、希望によっては喜んで即座に揮毫するを常とした。

老木の若き芽ざしの眺めこそ若木にまさる風情ありけり

も、こうした席上の即吟揮毫である（大谷惣三郎氏談）。

なお大谷氏の板東橋渡り初めの記念軸物には

新橋もいつかは朽ちんしかあれど渡り初めにし名はとほにして

と書いた。先生の言葉「旧知は年を経るに従って益々厚かるべし」（昭和二十四年六月廿三日記す）を、最後まで実践されたのである。

家族の人々 先生在官中は極めて多忙だったし、所用の訪客も多く、しかも家風は嚴格なので、お子様方に対する慈しみの外観は、一寸見られなかった。しかし実際は「子煩悩で叱られた記憶は一回もないし、夜煙草買いのお使いに行つて帰つたら、父が門前に立つて自分を見守っていてくれた」と、長女間庭梅子さんは言う。帰郷当時は既に戦時体制下で食糧物資の不足が漸く甚だしかった時代だ。先生は率先食糧増産に協力されたことは、前に述べた。その後奥様の逝去から引続き近親縁者の不幸があつたのに加えて、戦争末期及び終戦後の世情の混乱と頽廢とに対する先生の精神的悲痛と苦悩とは、全く想像に余りあつたのである。当時の家族は孫さんを加えて十五人であつた。先生中心の農作業は一層本格的となつた。先生の農作業については前に述べたから、ここでは家族のそれを記そう。

。ふぢ枝寛子前橋ヨリ堆肥ヲ輓キ来ル

。みつ枝ふぢ枝敏子と共に田口ノ畑ニ馬令薯ホリニ行ク

。正樹冬葱移植

。正樹陸稲ヲまく

。ふぢ枝みつと田草取り

。ふち枝敬介寛子等田草取り

かくて家族総出で農業労働に協力する傍ら、親戚縁家の吉凶や、千曲会群馬支会の会合などには、足の不自由になった先生の晩年よく正樹氏・ふち枝さんなど、リヤカーで送り迎えしている。昭和二十三年（一九四八）二月二十五日に「梅子喜代子リアカーニテ私ヲ載セテ行ケリ」と言っているのが、リヤカー最初の記録である。その後医者行きや弔問又は会合などに、「ふち枝ト共ニ」とか、「正樹モ行ク」とかあるのは、このリヤカー送迎のことである。これは今に至るまで近郷近在の美談として語り伝えられている。これは家族の人々が無意識の裡に先生の至愛に応えられた尊い聖華であると思う（都丸ふち枝さん追想文）。

なお孫さんへの愛は、折にふれて一層卒直に表現されている。誕生の時など喜びの胸をふくらませながらの、祝品の選定やそれが送り届けの配慮など思いやられる。又外孫の来訪や同居の孫さんだちの動静など、他の重要と覚しき事柄と同列に記録していることが多い。例えば昭和二十二年（一九四七）二月十一日に

。国会招集 吉田首相ニ推サル

たま／＼雪降りて「知子」時ニ四才なり

「ゆきは神さまのうんこかと、知子が正樹にたづねたるは純真なこどもの考へとしてはまことに面白し」

と書いてある。又松尾敏子さん（先生長女間庭梅子さん娘・松尾卓見君夫人）に与えられた手紙の一端を左に示そう（昭和二十三年正月十八日附）。

此間は万難を排して御出で下され嬉しく存じました。（中略）御両親の御厚意に甘んじて樂をする様のことのないようには御注意なさい。松尾家の御家風をよくのみこみ万事率先して労働に汗し細かに体験する積りになって下さい。若し負傷したならば水一〇〇gに尿素五g（ツマリ五％）の液にて洗ひマーキユロをつけて置けば決してトガめる様なこ

とはありません御注意なさい。風を引かないようにおはたらきなさい。

謙譲と素直と親切は婦徳の最上なものであります。御自愛を祈る

不二

孫さんに対するこうした愛情教訓はすべてに変わらなかつた。また先生始め同居のお子様・孫さん方の誕生日には一家揃ってお祝いし、亡き父君・奥様・お子様たちの命日には、必ず法要を欠かさなかつた。

#### 第四節 晩年の和歌・俳句

和歌・道歌 主として太平洋戦争終戦後のものを、ほぼ年月順に記したが、他の章節に引用したものは(再)として掲げる。何れも力強く人間道や自然の情景・日常生活の実況などを詠んでいる。

。亡き妻を偲びて

今更にこころやさしき亡き妻を偲びてわれはさみしかりけり(再)

今よりはやさしき妻の心もて我れは代りて子等をもらまし(再)

さきたちて逝くべき我れを後にして妻は去りけりわれはさびしも(再)

人生は五十と言ふと六十二生きて十二はのぶの徳なり

。悼貞子

一筋に我を力とたのみ来しあこはゆきしかいとしあこやも

よべばとて答ふる笑のなきものを呼びても見たき親心かな

いとし児を後にのこして逝く親の心はいかにかなしかるらむ

。部落の老人会席上にて

老木の若き芽ざしの眺めこそ若木にまさる風情ありけり（再）

。大君のみよはいつしか夢と消え悪魔の躍る世とはなりけり（再）

。金や物を見ると直ちに氣のくるふ不思議の人も世にはあるかな

。つらくとも守りぬかなむ人の道強く働きたいく忍ぬびて（再）

。米びつをながめて見ては明日のめしいかにせんなど思案投げくび

。これやしも人にはあるとよく見れば人の皮着る虚言のかたまり

。今の世は人のふるひのかけどころ多くの人はしひなりけり

。勝ち負けを心にかけず一筋につとめ励みて断えず進めや（再）

。やみぢ行く旅の衣もときも得ず今日も生きぬと思ふ世のさま

。あるがまゝに見るより外になきものをなにを尋ねて悟るつもりか

。大かたの世のうきことは忘れてもゆめ忘れめや親のめぐみを（再）

。さしのぼる朝日のごとく爽かに人の心もあらまほしけれ

。朝ぼらけ赤城の山の紫の雲たなびきて静かに動く

。とこしへに宝とせばや太刀つるぎ日本男子のたましひとして（再）

。有無々々と心の重荷負ひながら有平無平くらす氣の毒な人

。文あさる心地もいず此の頃はただ食ふことに僣促として

。すそ野皆もみぢにさえて赤城山刀根の流れにふもと洗うて

。葉に懸る雨滴に朝日かゞやきて五色にひかる寶石のごと

。碧空に五色の雲のたなびけり赤城の山の夏の曙

。すがくし青気あふれて夏日の出なえし心もよみがへるなり

。行幸田簡易水道ノ水源地ヲ見テ

おのづから断えず湧き出る清水こそこよなき郷の宝なりけり

。昭和二十二年元旦

新玉の年は迎へど大君の静けき春はいつに待たなん（再）

。七十年振りに湯の上獅子舞を見て

はからずも思ひ出深き獅子舞を今日みやしろの庭に見るかな

。白圭を懸けたる如き枝垂れ桃美ごとに咲きて庭もあかるし

。あるがまゝにみえる人なら偉いもの多くの人は色盲ひなり

。君子は人を器にす

役に立つ人に一くせあるものぞぎづなき玉のなき世なりけり

。大谷惣三郎氏板東橋渡り初めのために

新橋もいつか朽ちんしかあれど渡り初めにし名はとほにして（再）

。実りなば誰か食ふらん柿つぎて只活着をわれは楽しむ（再）

。みのりなば誰か食ふらめ我れは唯つぎ木の柿のつく（活着）を見んとて（再）

。有りがたやおおかげをもちて田植すみさつきの空の晴れ心地する

。今にして泌々我れは偲ぶかなわが恩人に報い得ざるを

。いんげんのなるとならぬは手（支柱）一つよき手もやらず種をそしるな

。何一つとり得なき身は一すぢに只我が拙を守らんとぞ思ふ

。老いぬれば死するは人の運命なり順能く逝くは目出度きことぞ

。喜寿について

肺炎の治りし今日は誕生日奇しくも喜寿のその日なりけり

戴きしねことたぬきの皮ごろも身につきまとひ老いを忘れん

喜寿越えて跡見かへれば瞬く間げに光陰は箭の如きかも（再）

世の常の道を辿りて喜寿を越えあと見送りてわが無為を恥づ（再）

。芋の葉をかぶりて遊ぶ児供らに呆れて叱る気にもなれず

。肉親の家族にてけんくわでくらす馬鹿もあり

犬猫も一しよに飼へば睦み相ひけんくわもせずにあそびたはむる（再）

。十知って一つも為さぬ人よりも一つ知ったら一つ行へ

。稲のみか人の苗圃も田舎なり成育いたる後はどこに移すも

。尻からげ鰯をすくふ児供等は国を救ふ兒と後になるらん

。柿の実に袋をかけて熟れを待つ樂しみもまたその中にあり

。断見もまた常見も本一つただ認識の仕方にぞよる

。朝涼に一鋤うつの心地よさ作物しげる夏の畑に（再）

。石井鶴三先生山梨県の桐原村と云ふ人里より二里を隔てたる山中に画室を建てられ転居される由



物皆の真相<sup>まこと</sup>写して先生の深山隠<sup>かく</sup>くりの画室<sup>えしつ</sup>はたふと

。大利根の瀬音もすみて朝まだき宵<sup>よる</sup>むらさきに赤城峯の浮く

。わきて世に求めなき身はおのずからつねの心ものどかなりけり

(昭和二十四年九月八日に詠める)

。在りし日の教への親のおもかげを此の石ぶみにはにしのばん

(同九月十四日詠める)

俳句・川柳

。悼貞子

春またで散りしかあたら寒椿

。よくを太刀つるぎを己が鏡にて (再)

。よくをたちつるぎのやうにすがすがし (再)

。さきがけて春のしらせや露のたう

。日の暮れて余光のそらに夏のたび

。移り香をたもとに忍び蘭の園

。宝川温泉千曲会にて

山峡の出湯にかじかききながら

かじかめも仲間入りして野天風呂

。柿一つ取るな尾長のたのしみに

- 。元朝や庭の柳の芽出たけり
- 。寒光に独りかゞやく福寿草
- 。寒光にかゞやくまどの福寿草
- 。喜寿の翁猫と一緒に日南ボコ（再）
- 。コココと草の芽に呼ぶ鶏仲間
- 。かきの木を接木であるよ喜寿の叟
- 。ふきざみに麦ふむ子あり風さむし
- 。老木に雪かと見えて梅かをる
- 。新緑をもれてつつちの花紅し
- 。朝おきてまづ玉葱のふとるを見
- 。整地して豆をうゑんと雨を待つ
- 。赤城峯に五色の雲や夏の朝
- 。熙々として世相をてらす初日の出
- 。まん開のばら朝な朝な我れを待つ
- 。ほこらかに芙蓉一輪地にさけり
- 。夕立に洗ひ出されて夏の月
- 。明月や幾興亡を照らしけむ

## 第五節 教訓・聖語

人によって教えを説く 針塚先生の教を受けた母校卒業生の殆どは、「自分は針塚校長の特別の恩顧を受けた」、「自分の今日あるのは全く先生のお陰です」と言う意味のことを、口を合わしたように言う。先生はよく「人にはそれぞれ必ず使うべきところがある」と言われ、常に「この使うべきところ」を、本人のため、また国家社会のために、育成しようとする。それには各人の性格・能力及び現在・将来の環境立場などを能く考慮して、時に応じそれぞれ懇切・適確な教訓指導をなさったのである。その方法は機に臨み、口頭を以て温情溢れる簡明な表現による場合もあったが、多くは手紙や揮毫によった。巻紙に墨色豊かな毛筆で諄々と世の教・人の道を説かれた先生の手紙は、数千通を数える筈だ。そして常に手紙を重視し、「手紙の上手な卒業生は必ず世に出る」「上手な手紙だと思った直後、その人は榮進することが多い」など、よく微笑みながら申された。「字は下手でも真面目に正確に書け」「少なくとも封書の表書きだけは毛筆にせよ」とも言われ、手紙の文章が解り悪かったり、誤字があったりすれば、朱書きで訂正して懇切に教え、直ちに本人宛返送された。この貴い光栄に浴した卒業生は、相当数にのぼっている筈だ。公務極めて多忙の上、日々あれほど多数の手紙を授受していられた先生としては、真に驚嘆すべき事実である。揮毫も無数の語彙の中から、それぞれ依頼者の向上進歩に役立つものを選ぶを常とした。従ってそれを書齋や応接間に掲げて、一生の箴言としている人の多いことは、前に述べた。

皇道と平和 わが国伝統の国体を尊崇し、これを根底としての平和を希求されたことは、時に応じた先生の言動に、これを見ることが出来る。昭和十三年（一九三八）年頭の辞に

（前略）尊厳にして万邦無比なる我国体の本義を益々闡明し、敬神崇祖・義勇奉公の精神を振起し、挙国一致尽忠報

国・堅忍耐久、以て能く時艱を克服し（後略）

と述べている。そして当初日米工業力の大差を認めて、「勝算絶対に無し」と断じ、対米開戦に強く反対したが、宣戦布告と共に「已んぬる哉」と、戦争協力に跡み切った。しかし敗戦後は先生本然の素志が、事々に強く現われ、「勝ち負けを心につかず一筋につとめ励みて断えず進めや」つらくとも守りぬかなむ人の道強く働きたいと忍んで、「挺身従事」を論し、世相の混乱・道義の頹廢については「大君のみよはいつか夢と消え悪魔の躍る世とはなりけり」「新玉の年は迎へど大君の静けき春はいつに待たなん」と嘆いていられる（和歌は何れも前出）。また喜寿の賦詩にも「猶有<sub>レ</sub>心中倅<sub>二</sub>一事<sub>一</sub>、共看四海太平時」の句がある。この精神は先生一生を通じて、先生の日常一挙手一投足に発露し、それを「実践躬行」して、「率先垂範」の実を示しているのである。

**揮毫語集** 先生の揮毫は 学校関係や卒業生に限らず、広く世上の依頼者にも、気軽に応ぜられたから、これに使用された語彙・詞藻は無数と言うべきだが、それ等の主要と考えられるものを、便宜上徳目の大要によって分類して、次に記すことにする。言うまでもなく、これ等の語句は、手紙や一般文章及び講義・講演又は直接個人に対する訓諭・教訓の中にも常時使われていたもので、前に述べたように、先生の教導実践の要約象徴とも言うべきである。

(一) 努力 流汗鍛鍊。青年、熱汗、当<sub>レ</sub>拭<sub>二</sub>老後<sub>一</sub>。活動也者生命而存在也。奔輪不<sub>レ</sub>锈、流水不<sub>レ</sub>凍。進而当<sub>二</sub>難局<sub>一</sub>、挺<sub>レ</sub>身従<sub>レ</sub>事。実践躬行。一事貫行。竭<sub>レ</sub>力致<sub>レ</sub>身。協力邁進。百忍図成。千里行始<sub>二</sub>於足下<sub>一</sub>。率先垂範。忍終不悔。

(二) 誠心 信言不<sub>レ</sub>美、美言不<sub>レ</sub>信。巧言雖<sub>レ</sub>美用<sub>レ</sub>之必滅。力不<sub>レ</sub>勝<sub>二</sub>於徳<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>徳勝者昌、以<sub>レ</sub>力勝人亡。僕拙勝<sub>二</sub>巧心<sub>一</sub>。仁者無敵。明則誠。至誠一貫。千人之諾々、不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>一士之譁々<sub>一</sub>。

(三) 寛容 寛厚待<sub>レ</sub>人。寛則得<sub>レ</sub>衆。処<sub>レ</sub>己以<sub>レ</sub>謙、待<sub>レ</sub>物以<sub>レ</sub>恕。不<sub>レ</sub>遷<sub>二</sub>怒<sub>一</sub>。大<sub>二</sub>其心<sub>一</sub>容<sub>二</sub>天下之物<sub>一</sub>、虛<sub>二</sub>其心<sub>一</sub>容<sub>二</sub>天下

之善。心大者百物皆通，心小者万事皆病也。寬厚能容物。人雖至愚，貴人則明，雖有聰明，怨己則昏。廓落胸襟同大虛。天空任鳥飛，海濶委魚躍，大丈夫夫不可無此度量。

(四) 修養 虛住冥埽。學劍養正。琴心劍胆。貧亦風流。禍福眼前之事，是非身後之名。靜觀自得。簡儉作家

風。彫琢復朴。處靜以觀動，居逸以窺勞。處腴能不潤。虛心處沖默。沖靜約自然。一忍七情皆中和，再忍五福皆駢臻。雖敗局未嘗無勝勢，雖勝局未嘗無敗勢。禍莫大于縱己之欲，惡莫大于言人之非。養勇期除惡，輪忠在滅私。自非讀萬卷書，安得為千秋人，自非輕二己勞，安得致兆人安。明鏡止水。虛靜無事。寡欲以養心。盈科而進。功不可以虛成。居劇體常閑。獨木難茂。聰明聖知。柔能制剛。柔弱勝強剛。天地与我同根，万物与我一体，如夢相似。人生不滿百，常懷千載憂。五寸鍵制開闔。万象即我。展三碎啄機。

(四) 君子道 休与小人仇讐，小人自有對頭，休向君子諂媚，君子原無私惠。守素養德履謙致和。小人皆俯從其易，不能力行其難，故禍敗及之，君子勞處其難，不能逸居其易，故福慶流之。明者視無形，聰者聽無聲，謀者謀於未兆，慎者慎於未成，不困在於早慮，不窮在於早予。敏則有功，惠則足以使人。黎民欲仰德，丹心膺神明，淨心對神德，正身而從事。剴切見真。上善如水。和光同塵。挫銳和光。仁者無敵。善行無轍迹。慈故能勇，儉故能廣，不敢為天下先，故能為成器長。

## 第七章 逝 去

### 第一節 晩年の健康

昭和二十三年（一九四八）五月初旬近親宛手紙の中に「私は近頃は足の屈伸が不自由の爲め暇さえあれば寝て居ります。畑の仕事は力がなくなつて出来ません」と書いてある。前に述べたように、その頃はリヤカーに乗つて、ふぢ枝さんその他に送り迎えされていた訳だ。二十二年（一九四七）十一月風邪から肺炎を起こし、数日間絶対安静を保つていたが、三十日には「肺炎の治りし今日は誕生日奇しくも喜寿のその日なりけり」（再）と詠まれ、月を越して十二月三日「病氣全快起床」されている。その外は耳が遠くなつただけで、時に齒科や眼科の医師に行っているが、微恙に過ぎなかつたようだ。しかしその頃から県その他の公式会合には、身体故障の理由で、すべて缺席し又は代理出席を頼んでいる。群馬県選挙管理委員（委員長）も次の如き辞職願を提出し、翌二十三年（一九四八）十月解任されたが、その間一回も委員会に出席しなかつた。

#### 辞 職 願

病氣ニ就キ選挙管理委員ノ任ニ堪エマセンカラ辞職サセテ頂キタイト思イマス何卒御許可ヲ願イマス

昭和二十二年七月五日

ついで二十三年（一九四八）夏頃から、ビタミン注射を何回も続けられ、「疲労多シ終日静養」の日も出て来た。六

私儀

月十一日心臓結滯の症状を見せたが、医師は「過労のための一時的現象だ」と診断し、その後は平静に復した。二十四年（一九四九）に入って三月二十日過ぎ、ひどい腹痛を起こしたが、経過良好で四日ばかりで平癒している。しかし同年四月二十七日大日本蚕糸会は、先生多年の功績を称えて、総裁皇太后陛下より恩賜賞を下賜したが、先生は健康上已むなく正樹氏を代理として拝受したことは、前に述べた。その夏頃から助間神経痛が頻発して、終日臥床と言う日が多く、体の調子の良い時を見計らっては、畑作や庭内の除草をする程度だった（正樹氏及び都丸ふち枝さん追想文）。

## 第二節 逝 去

昭和二十四年（一九四九）九月二十一日、朝は小雨だったが、やがて晴れ渡り、爽快な秋日和となった。先生はこの日特に気分がよろしく、畑に下り立って除草をした。近所の人々が挨拶して通り過ぎた。他に嫌いでいる妹の儘田フキさんが、お彼岸参りの挨拶に来たので、畑から上り「私も近頃少し心臓が弱くなったが、今日は珍しく良い気持だったので畑に出た」と、いろいろ楽しく話し、フキさんが辞去してから、昼食中「胸がいつものように痛い」と言って、食事を中断し寢床に行った。その後正樹夫人が尋ねた時には、既に死去されていた。午後二時半頃であった。医師は心臓癱痺の診断をした。この年六月十一日に貰って来た愛猫が、先生最期の床に同床していたことは、前にも述べた（正樹氏及び都丸ふち枝さん追想文）。かくて先生の動物愛は、最後の一瞬まで徹底的だった。数え年七十九才。

先生は少年時代から厳しい農作業や長距離徒歩競争などで錬成され、その後も柔道の猛練習・マラソン・登山などで心身を鍛え、更に日常の生活態度そのままだが、すべて肉体及び精神の強化鍛錬道場となっていた。帰郷されて後も、しばしば述べたように、この精神の貴い連続であったが、計らざりき、今や榛名山下の巨星は、文字通り突如として墜ちてしまった。越えて二十五日信州大学繊維学部長兼上田繊維専門学校長伊藤武男氏葬儀委員長となって、盛大な葬儀を

執行した。なお導師には先生の遺志に従い、上田専門学校及び針塚先生と特に関係の深かった長野県別所常楽寺住持半田孝海大僧正一人に依頼し、左の法号を承けた（半田孝海師追想文）。

高德院 殿 芳 誉 長 安 大 居 士

### 学生諸君に寄せる

（これは「常陵」——一九五〇——に寄稿された針塚先生最後の公刊文章である）

去る日校友会雑誌を恵まれ、又近く学校新聞を発刊せらるゝそうである。誠に欣慶の至りです。之に依って先生方の新研究や御調査並に潑刺たる学生諸君の息吹に接するを得るは、老生に無上の楽しみであります。今や敗戦の余禍、国家全体の空気は涸濁し、人道地を払い、物資缺乏の爲めに、わずかに生命を保つ丈になりました。それにも拘らず諸君が再興日本を目指して、勇猛に活動の途につかれたのは、真に頼もしき次第であります。幸にも信州には身心を浄化する高山霊峯が連立して居ります。登山によって健康を養い、心の洗濯をなし、英気を養う程良いことはありません。清涼なる空気、絶美なる御花畑、雲海、御来光、峻峯、唯絶賛の嘆声を漏らすのみであります。余程の不良の人間でも六根は清浄化します。支那の詩聖李白は登山の愛好者だったと見えて湖山の詩があります。実によく高山の気分を出して居ります。諸君の御愛誦を願います（青蓮は李白の別名）。

青蓮一去逸才稀 誰復登高能賦詩

世界三千帛掌握 鵬程九万可風追

人間草木未生处 天上神仙来会時



為報東西漫遊客 不攀大岳莫談奇

と云うのです。高山には釈迦もクリストも孔子もソクラテスも皆集合して居ります。而して絶大なる説教をして居ります。蘇東坡が

溪声便足度長舌 山色寧非清淨身

と吟じたのは実に面白いと思います。高山大岳は真に絶倫の修養壇上であります。而して廣眸なる氣宇を養い、包容力を大にして、何処に往つても平和の中心となつて働き、自ら範を示して、礼を實行して下さい。礼なき処に和はありません。人に先だつて礼をする丈の人間には、偉大さが加わります。孔子も云つて居ります「礼は之を和を以て貴しとなす」、真乎にそう思います。毎日校内に於て面会しながら、途で知らぬ顔をするようなことでは、和は保てません。

やがて産業革命が来ると思っています。原子力の応用も、数年後に見ることが出来ましょう。已に十年以上も前に、米国人ジョン・ラッカースと云う人が、汽関車に利用する特許を取っておるそうです。総べて人力が生産力であるのだから、原子力利用によつて労働力が低価になつた場合には、如何なる状態に産業界がなりますか、諸君も考へて貰ひたい。今より準備をすべきであります。

## 弔 辞

多数の弔辞の中から左の五通を選びました。

弔 辞

財団法人大日本蚕糸会  
会頭 正四位勲三等

吉 田 清 二

正三位勲一等針塚長太郎君溘然として長逝せらる 君資性温厚篤実にして明治二十九年帝國大学農科大学を卒業して

拓殖務省属となり後横浜生糸検査所・蚕業講習所・文部省・高等師範学校等に歴任し 同三十七年文部省視学官に任ぜられて実業学務局第一・第二課長 図書審査官等を兼務す 同三十九年欧米各国に留学同四十一年帰朝して科学教育の振興に努力す 同四十三年上田蚕糸専門学校の設立せらるゝや初代校長に任ぜられ幾多の労苦を重ねて内容の充実に擴張とをはかり質実剛健の学風を醸成して人格の陶冶に専念し昭和十三年退官に至る迄約三十年の久しきに亘りて育英事業に精励この間二千余名の人材を養成して業界に送り又多年大日本蚕糸会評議員・蚕糸同業組合中央会議員・日本蚕糸学会評議員等の要職に就きてよく其の任につくす等蚕糸業上に貢献せる功績寔に偉大なり 仍て本会は曩に第一種功績賞を賜り更に総裁皇太后陛下の旨に依り特に恩賜賞を贈与してその功績を表彰せり 今や業界寔に多事君の指導に俟つべきもの多きの秋この計に接し哀悼極り無し 茲に謹みて弔辞を呈し以て哀悼の意を表す

弔

辞

日本蚕糸学会長

平塚

英吉

故針塚長太郎君ノ告別式ニ際シ 君ガ本会創立以来評議員トシテ蚕糸業発展ノタメ多大ノ寄与ヲサレタコトヲ憶ヒ衷心ヨリ深ク哀悼ノ意ヲ表シマス

弔

辞

東京農工大学繊維学部  
東京繊維専門学校校長

木暮

榎太

日頃私共の最も敬慕しておりました温容慈父の如き針塚長太郎先生忽然御薨去との悲報を受けまして暫くは只々呆然として天命の尽きたるを痛恨するのみでありました

先生には明治二十九年帝国大学農科大学を卒業せられて以来蚕糸業教育に努力を傾倒せられたのでありますが同四十

三年上田蚕糸専門学校初代校長に就任せられますや開校当初の困難なる事業を卓越せる手腕と叡智とによって充実された内容完備された研究設備人材の集中等に成功せられ世に知られた上田蚕糸専門学校として実業専門教育上正に一新生面を開かれましたことは洵に後輩の範とするところでありますと共に一面あの高邁なる精神と玉の如き温厚謙讓の人格をもって子弟を誘掖薫陶されまして質実剛健の学風を作り人格の陶冶に努められ針塚精神こそ即ち校風とまでなったのであります御退任の今日尚その尊い精神が脈々として受け継がれておりますことは同窓各位の師表の礼と慈父の恩に酬いんと春花秋冷の御見舞を忘れぬ一事をもっても知られるところで如何にその教育が立派であつたかゞしのばれるのであります

又私共東京繊維専門学校も先生の御薫陶の数々がありまして本校の前身蚕業講習所時代先生には教官として極めて熱心に御教え下さいました事は古い学窓の人達の今も語り草となつてゐる所であり又本校が文部省に移管致します時にも先生の絶大なる御尽力により所期の目的を達したのであります永く感謝して居る次第であります御辞任後も西ヶ原同窓会名誉会員として陰に陽に同窓発展の爲御力添え下さいましたことなど銘記すべき事項は洵に枚挙に遑のない程で深く感謝して居る次第であります御退官後昭和十五年大利根の清流に臨む生家に晴耕雨読の三昧境に入られましても尚その御高見を拝聴する機はありましたので御在任当時と同様心強き限りであつたのであります然るに今や突然の御薨去にあつては失望落胆全く暗夜に灯を失つた感を深くするのであります今靈前に跪きまして万感交々胸に迫り哀しみ極りありません

冀くは先生の英靈不滅の加護と偉大なる御教訓を永久に垂れさせられんことを聊か微忱を披瀝して偉靈を弔います

## 弔 辭

信州大学纖維学部  
上田纖維専門学校  
部長 校長

伊 藤 武 男

上田纖維専門学校名誉教授正三位勲一等針塚長太郎先生溘焉として薨去せらるる我等一同洵に痛悼の至りに勝えません先生の官界生活は実に四十一箇年の永きに亘り其間拓殖務省・生糸検査所・蚕業講習所・高等師範学校・米沢高等工業学校長事務取扱・文部省実業学務局等に歴任せられたのでありますが文部省視学官在職中明治四十一年八月選ばれて蚕糸専門学校創立委員を命ぜられ同四十三年三月本校設置が公布せらるゝや同年八月三十九才を以て初代校長に就任されたのであります爾来先生は剛健不屈の資を以て所信に邁進し機を見るに敏事を所するに明克く校務を變理せられたのであります学校草創に当っては或は自ら鋸を執って桑園の開墾に従事され或は山野に良木も物色して校庭に移植せらるゝ等我が校風の精粹たる「汗の体験」と「挺身従事進当難局」の礎石は早くも先生の垂範によって投ぜられたのであります先生は慈愛信義良識を併せ持つ天性の教育者であられました人に接するに温容懇切・言々句句後進の論しならざる無く一挙一動人の範たらざる無く一度先生に接するや高風は深く心に刻まれて終生欽慕の情を禁じ得ないものがありました先生は清濁併せ呑む寛仁大度の人でありまして人の長を挙げて短を語らず一度信ずるや己れをあげて人に委せられましたこの余徳は今日に及び師弟和楽の淳風は我が校風の一となつて居ります先生は学究でありましたが又広き趣味の人でありまして飄書の域は広く東西にわたり殊に支那の古典籍には最も親しんで居られました書画・俳諧・川柳・謡曲・刀剣等行くとして可ならざるはなく何れも大家の風格を具えて居られました別して樹木を愛好され先生手植の木々は今や鬱蒼として学校の風致に独特の趣を添えています

先生は生涯を通じて実業教育に全魂を捧げられました而して其の薫陶を受くる者三千是等卒業生は夫々新日本の建設に邁進して居ります殊に先生の我国蚕糸業界に遺された功績は洵に偉大なるものがありまして本年四月には大日本蚕糸会

総裁皇太后陛下より特に其功を嘉せられて恩賜賞下賜の光栄に浴せられたのであります

斯くて今や我校は先生の提擲に依る校風に順い其の精神を発揚すると共に校運愈々隆々新制大学として名も信州大学繊維学部と更り新館の装容略完成し先生遺愛の校庭樹木は亭々として茂り校の内容外観共に充実して將に纖維科学界の權威を誇らんとして居ります

今や学制改革の秋に際し庶政は教育の力に俟つもの愈々大なる秋庶くは英靈長えに留り給ひ我が文教の隆運を守護せられんことを 茲に謹んで哀悼の微忱を表し併せて御冥福を祈ります

## 弔 詞

千曲会代表 蒲 生 俊 興

針塚先生卒然として御逝去!!秋風蕭々学窓をかすめる夕べ悲報を手にして我等は愕然として色を失い又言うべき言葉を知らなかったのです否あれほど御壮健だった先生が突如として御他界なされたとはとても信ずることが出来なかったのです嗚呼無常迅速の世とは言え何たる事か全国三千の子弟は皆泣いているのです先生は昭和十三年御退職越えて十五年上田を去って故山に閑居文字通り晴耕雨読に入られました我等は勿論限り無い寂淋を感じましたがしかし先生が御郷里に御健在である事は我等にとって大きな力でありました我等は事あれば先生に書翰を以て或は遙々訪れて親しく先生の御教訓を乞い御意見を承るを常としました先生は書翰に対しては直ちに御返事下され又訪問した際は世にも喜ばしげに我等を迎えて身にしみるような御教訓や懇篤なお話を賜ったものですその高邁な人生觀円満な常識滾々として尽きぬ温情それはたゞ恩師というだけのものではない我等の魂を救う偉大な教主とも言うべきですつまり先生は我等にとってまことに生命力でありました今や我等はこの生命力を失ったのです先生のお姿は最早御郷里にも見る事が出来ません我等の寂淋と哀愁は耐え難いものがあります上田の春風豊秋の秋雨我等の涙は長く尽きないでありますよう本

年母校は信州大学繊維学部として力強く発足しました先生が本校の発展をどんなにお喜びなさったかは想像できますしかし我等は先生が心から本校の発展を御満足下さるには尚相当の年月日を要する事を感じます従ってそれまでは先生も健在せられて常に我等を教訓鞭撻せられん事を念願していました先生の蒔かれた種子育てられた幹や枝がいよく繁茂して美事な実を結ぶ日まで先生の御健在を祈ったのですそれに又我等は先生の御薫陶に対し御恩返しをしていません慈父にも優る御いつくしみに対しても孝養を怠っています返す／＼も痛恨の至りであります我等は茲に先生の蚕糸界や教育界に与えた絶大な御功績をたゞえる事をしません又先生に対する数々の憶い出も語るを避けますたゞ同窓三千の無限の歎き万斛の涙を告白して先生の御冥福を祈る許りです嗚呼先生今や亡し！御靈前にぬかずけば温容髣髴莞爾と微笑まれるを覚え涙潸然として禁ずるを得ません希くは饗け給わらん事を

# 年譜

七二

明治四二、三 群馬県群馬郡豊秋村中村に誕生  
 明治二、四 中村小学校入学  
 明治六、三 四明高等小学校卒業  
 四 木檜中学校（後の前橋中学）入学  
 明治三、〇 最初の上京  
 明治三、三 木檜中学校退学（四年終了）  
 七 東京農林学校予科第一学年入学  
 明治三、九 農科大学予科二年級編入  
 明治六、七 高等中学程度の学力検定試験により農科大学予科卒業  
 明治六、七 東京帝国大学農科大学農学科卒業  
 明治三、六 拓殖務省属に任ず  
 二 拓殖務省廃省により廃官  
 二 農商務省生糸検査所技手に任じ横浜生糸検査所勤務となる  
 三 蚕業講習所技手を兼ねる  
 明治三、二 青森県士族故陸軍少佐山本誠喜長女ノブさんと結婚（明治二十九年秋から婚約中であつた）  
 五 文部属に任ぜられ実業教育局勤務  
 二 同専門事務局勤務  
 明治三、六 高等師範学校教授を兼ねる

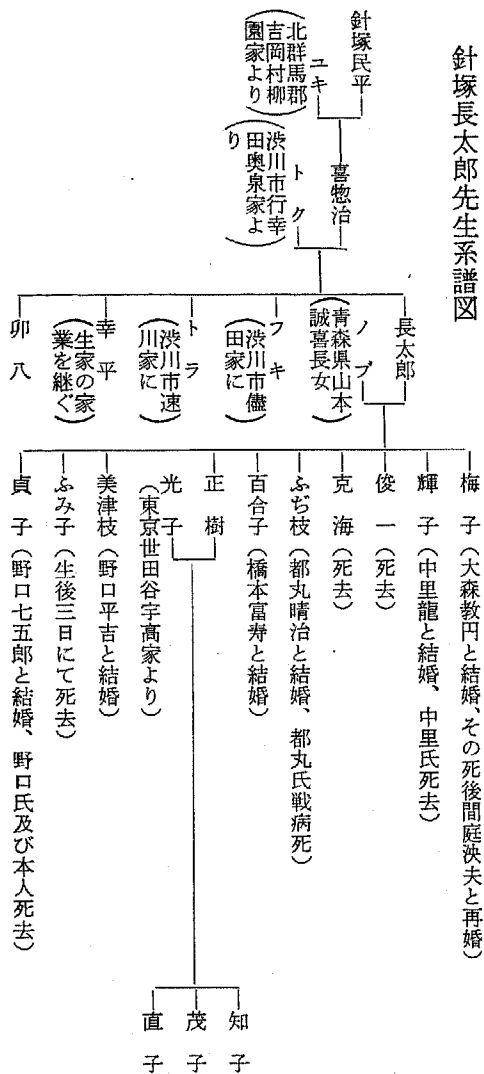
明治三、四 実業事務局第一課長を命ぜらる  
 五 同 第二課長兼務  
 二 文部省図書審議官に任ぜらる（高等師範学校教授はそのまま）  
 明治六、五 高等小学校及び実業補習学校農教科書編纂委員を命ぜらる  
 二〇 実業学校学科課程並設備調査委員を命ぜらる  
 明治五、九 文部省視学官兼文部省図書審議官に任ぜらる  
 明治六、二 実業学校教科細目調査委員を命ぜらる  
 明治六、六 小学校教育功績審査委員を命ぜらる  
 明治六、二 農業教育研究の爲め滿二カ年間米國及び独國へ留学を命ぜらる  
 明治四、三 盛岡高等農林学校教授に任ぜらる  
 明治四、五 帰朝  
 五 文部省視学官に任ぜらる  
 八 蚕糸専門学校創立委員を命ぜらる  
 明治四、九 師範学校教授要目取調委員を命ぜらる  
 五 米沢高等工業学校校長事務取扱を命ぜらる  
 六 右免ぜらる  
 八 上田蚕糸専門学校長に任ぜらる 文部省視学官は旧のまゝ  
 明治四、四 上田蚕糸専門学校養蚕・製糸二科にて開校  
 大正三、七 高等官二等に陞叙せらる

|       |                              |
|-------|------------------------------|
| 大正三、八 | 母トクさん死去                      |
| 大正五、三 | 蚕糸同業組合中央会特別議員に囑託される          |
| 五     | 文部省視学委員を命ぜらる                 |
| 大正六、一 | 長女梅子さん大森教田氏と結婚（大正七年十二月大森氏死去） |
| 大正七、二 | 養蚕科一年生の校長排斥ストライキ 約一週間にて終熄    |
| 大正八、四 | 絹糸紡績科増設                      |
| 七     | 皇太子裕仁殿下行啓・拝謁仰付けらる            |
| 大正九、九 | 長野県蚕糸業聯合会名誉会員に推薦さる           |
| 九     | 同 桑苗組合聯合会名誉会員に推薦さる           |
| 一〇    | 創立十周年記念祝典挙行                  |
| 大正二、一 | 高等官一等陸叙                      |
| 一     | 次女輝子さん中里龍氏と結婚（中里氏昭和三十四年三月死去） |
| 二     | 上田市聯合青年会長となる（大正十三年一月退任）      |
| 二     | 長女梅子さん間庭決夫氏と再婚               |
| 九     | 次男克海氏死去                      |
| 大正三   | 朝鮮・満州視察                      |
| 一〇    | 大日本蚕糸会学芸委員囑託さる               |
| 昭和二、二 | 父喜惣治氏死去                      |
| 四     | 勲二等に叙し瑞宝章を授かる                |
| 八     | 校長転勤の新聞辟令（事実でなかった）           |

|        |                                |
|--------|--------------------------------|
| 昭和四、二  | 三女ふぢ枝さん都丸晴治氏と結婚（都丸氏昭和十九年八月戦病死） |
| 七      | 長野県教育調査会顧問を囑託さる                |
| 三      | 従三位に叙せらる                       |
| 昭和五、三  | 日本蚕糸業史刊行監修を囑託さる                |
| 昭和六、二  | 還暦祝賀会挙行さる                      |
| 昭和七、一  | 四女百合子さん橋本富寿氏と結婚                |
| 昭和八、二  | 長男俊一氏死去                        |
| 昭和九、三  | 信濃教育会名誉会員に推薦さる                 |
| 昭和一〇、六 | 長野県選挙粛正委員に囑託さる                 |
| 一〇     | 創立二十五周年記念祝典挙行す                 |
| 一〇     | 寿像建設さる                         |
| 昭和二、一  | 朝鮮・満州視察                        |
| 昭和三、一  | 五女美津枝さん野口平吉氏と結婚                |
| 三      | 信濃教育会会長就任（昭和十七年三月辞任）           |
| 四      | 勲一等に叙せられ瑞宝賞を授けらる               |
| 昭和三、三  | 依願本官を免ぜらる                      |
| 四      | 正三位に叙せらる                       |
| 四      | 退官報告に伊勢神宮参拝                    |
| 五      | 上田市長に推薦されて受けず                  |
| 五      | 上田蚕糸専門学校名誉教授の名称を受く             |
| 二      | 千曲会より謝恩金贈呈さる                   |
| 三      | 針塚賞設定（千曲会）                     |



# 針塚長太郎先生系譜図



昭和一五、一 満州旅行  
上田市を引揚げ郷里群馬県に帰る  
勤続三十年以上の実業教育功勞者として実業教育  
振興中央会長から表彰せらる  
三男正樹氏宇高光子さんと結婚  
夫人ノブさん死去  
昭和一七、二 七女貞子さん野口七五郎氏と結婚 (野口氏昭和二  
昭和一八、三 十年三月戦死貞子さん同十二月死去)

昭和一九、三 戦争供出のため寿像撤去  
昭和二三、二〇 群馬県選挙管理委員 (委員長) となる (昭和二十  
三年一月辞任)  
昭和二三、二 千曲会より喜寿の祝典を受く  
昭和三四、二〇 群馬大学創立委員となる  
昭和三四、六、三 永眠  
昭和三六、二〇 寿像 (胸像) 再建さる